

# のんびり

03 non-biri  
2012 Winter



TAKE FREE

# 秋田県 能代市落合



ゆるキャラとなべっこ！

10月2日。今回の撮影の舞台は秋田県北部の能代市。この日は台風一過で、雲一つない青空に恵まれました！  
こんな秋晴れの日の秋田県民の楽しみといえは「なべっこ」！ 遠足気分、野外でのんびりと鍋を囲む、秋田の定番行事です。その、なべっこの主役はもちろん、穫れたての新米で作った「きりたんぼ鍋」。続いて、大きなおむすび、がっこ（秋田弁で漬け物のこと）、果物……。さらには能代名物の納豆や赤ずしまで！ どれもこれも、地元の料理店「やま久」さんが心をこめて作ってくださいました。

そんな秋田の味覚を「食べたーい！」と登場したのが、県内各地のゆるキャラたち。さすが、秋田はゆるキャラの宝庫といわれるだけあって、どのキャラもかわいい！ さらに、そこにやってきたのが、地元「愛慈幼稚園」の子どもたち！ みんな、ゆるキャラに抱きついたり、ごちそうに目を輝かせたりと大興奮！ 子どもたちの全開パワーに、カメラマンの浅田政志もタジタジ……。その様子を守るように、後ろに構えているのが、能代が誇る「べらぼう風」。なんともユニークなアツカンペーの顔は、魔除けとなり幸せをもたらすといわれているんですよ。  
そんな、おいしい！ かわいい！ 幸せムードたっぷりの表紙撮影の映像は、のんびり公式ウェブサイトでご覧いただけます。



のんびりしたいは  
みんなのきもち  
のんびりできるは  
ゆたかなあかし  
のんびりまつすぐ  
秋田のくらし

秋田にはうまい飯とうまい酒があります。  
その豊かさが秋田の実直なものづくりを支えてきました。  
そして同時に、秋田の人々のなかには、大らかで力強い「のんびり」精神が育まれました。

そんなのんびり秋田は、  
右肩上がりの経済成長という  
ゴールなきゴールに向かい  
懸命に走ってきたニッポンにとつて  
まるでピリを走るランナーのように  
映っていたかもしれませぬ。

けれど世の中は変わりました。  
順位など気にせずのんびり歩いてきたことが  
まさに「のんびり」となる時代がやってきました。  
日本人の多くは今、  
うまい飯が食べられてうまい酒が飲めるという  
当たり前の豊かさについて考え直しています。  
しかし秋田では昔も今も、ずっと  
それが人々の暮らしの真ん中にありました。

ピリが一番だ。上だ下だ。と  
相対的な価値にまどわされることなく  
自分のまちを誇りに思い、他所のまちも認め合う。  
そんなニッポンのあたらしい「ふつう」を  
秋田から提案してみようと思います。

のんびり  
編集部





今号の  
「あきたびじん」ぶつ  
相関図  
秋田で暮らす美しい人々あきたびじん

**「広報ささかた」**  
細矢宗良さん 担当  
今川洋さん 詩

**池田医院 (修三さん生家)**  
池田左千雄さん 左千雄さんの奥さん

**にかほ市象潟郷土資料館**  
齋藤一樹さん 学芸員

**池田作品コレクター**  
横山八重子さん ヤエ美容室  
柴田堯さん  
國松滝子さん 民芸くままつ

**秋田メンバー**  
笹尾千草  
矢吹史子  
鈴木竜典  
田宮慎

**県外メンバー**  
藤本智士  
浅田政志  
広川智基  
山口はるか

情報提供: 竹内賢さん 市議会議員  
つづ子: 池田修三さん

編集チーム

Contents

1 のんびりまっすぐ秋田の暮らし

4 特集 秋田「池田修三という、たからもの」

6 第1章 池田修三との出会い  
ほかにあります 秋田ゆかりの『表現者』

12 第2章 池田修三をめぐる旅へ  
ほかにあります 秋田の『贈答品』

20 第3章 池田修三に近づく  
ほかにあります 秋田の『資料館・博物館』

28 第4章 池田修三に触れる

34 第5章 池田修三とともに

43 写真家 浅田政志の 撮らずにはいられない!!  
第3回/秋田美人

48 下戸式秋たんぼう 福田利之  
第3回/お肉と澁谷のミルフィーユ

54 秋田には大森山動物園があります。  
AKITA ACCESS MAP

62



秋田

「池田修三

という、  
たからもの」

取材文 藤本智士 写真 浅田政志・広川智基・鈴木竜典  
Text Satoshi Fujimoto Photo Masashi Asada / Tomoki Hirokawa / Ryusuke Suzuki

県外からやってくる僕のようなメンバーと、県内で暮らすメンバーとが一緒になって構成される本誌『のんびり』チーム。その編集会議は、毎回いろんな発見と驚きに満ちていて、とても楽しいのです。そして今回も「さあ、次号の特集はどうしますか？」という、秋田編集チーム、ヤブちゃんへの投げかけから、話し合いはスタート。そこで僕は開口一番、春からずっとあたためてきた企画について提案しました。「いよいよ池田修三の特集をしたいと思うんだけど……」

さて、池田修三って誰？ という方がほとんどだと思います。いけだしゅうぞう。享年82歳。秋田県にかほ市象潟出身の版画家さんです。今回の特集は、どうして僕たちが池田修三という人に惚れ込んで、そしてその素晴らしさを日本中の人たちに届けたいと思うのか？ そのことをまずはきっちり伝える号したいと思います。

さあ、あたらしい旅のはじまりです。



「りす」1980年

# 池田修三 との 出会い

第1章

## 池田修三？

今年の3月、秋田の友だちの家に泊まらせてもらったときのこと。無理矢理敷いてくれた布団が、ふわふわの雲のように床を埋め尽くしたその部屋で、僕は一枚の版画に出会いました。片手に真っ赤な林檎を抱え、ほおづえをつきながら、くりくりお目目で佇む少女の絵。どこか物悲しげなその少女が、ぼんやり宙空を眺めるその瞳の奥に、

僕はなぜか秋田の風景を見た気がしました。「これって誰の作品？」そう聞く僕に、友だちは「池田修三」と答えてくれました。そして「確か、秋田の象潟出身だったはず……」とも。

池田修三。大正11年秋田県象潟町（現にかほ市）生まれ。旧東京高等師範学校（現・筑波大学）芸術科卒業後、秋田県の由利高校で6年、聖霊学園で3年、教師を務めますが、昭和30年、33歳のときに退職し上京。それまで取り

組んできた油絵を捨て、以降、木版画に専念。子どもの情景を中心に、数々の版画作品を生み続けます。画商さんを通して、秋田県内だけでなく、全国の主要都市でも個展を開催し、全国にファンを増やしていった池田修三さんでしたが、惜しくも平成16年11月10日に死去。82歳でした。

それらの作品たちが、あまりに素晴らしかったからです。そして、先ほどの略歴のとおり、池田修三さんという人が、既にお亡くなりになっているという事実が残念でなりません。しかし、まさには僕は池田さんが死してもなお、生き続ける作品にまっすぐ胸を打たれました。そして僕は、秋田の人々の暮らしのなかにある池田修三という存在について知りたいと思い始めます。それはシンプルに、僕と池田修三との出会いが、どこかの美術館でも、何かのコマーシャルでもなく、友だちの家の壁だったからです。

## 唯一無二の作家

何気ないことのように思うかもしれませんが、これはすごいことなんじゃないか？ と僕は思いました。一人の作家の作品が押し入れにしまわれることなく、こんな風に秋田の暮らしのなかに根付いていることの稀有さ。その予感が、どんどん確信へと変わっていったのは、『のんびり』編集部秋田メンバーに、池田修三さんについて聞いてみたときのことでした。そのときの秋田のみんなの言葉をまとめてみます。



秋田、本荘、象潟と郷里で盛岡でもやっています。全国にファンがいると、ません。と、しよつ中刷らなければ入みたいになっちゃって、来て時間を食われちゃられない悩みがあります。やっています。ようやく二十点出来れどとても出来ません。版は全部取ってあります。この二十五年で千点。題材が甘すぎるとも、竹久夢二だつて正当けてすからね。

池田修三氏像 彼の版



## 初購入の衝撃

● 実家には何枚かあって、いまだに飾られているかも。

● 自分たちの親の世代は、何かのお祝いで、池田修三さんの作品をいただくことが多かった。

● 逆にプレゼントとして池田修三さんの作品をあげることも。

● 名前は知らないけれど、絵を見たらわかるという秋田の人は多いと思う。

● 池田修三さんは、いわさきちひろさんのような、全国的に知られた作家だと思っていた。

● 80年代に秋田相互銀行（現・北都銀行）のカレンダーや通帳に、池田修三さんの版画が使われていた。

なるほど〜！ 僕はもう感心しきりでした。秋田の人たちにとっては、当たり前のようにあった、池田修三さんの作品。そして僕がもっとも惹かれたこと。それは、池田修三さんの作品がプレゼントとして多く使われていたということでした。池田さんの作品を贈り合うという文化。それはもう、ちょっと素敵すぎます。そして僕も、池田修三の作品が欲しい！ ではなく、池田修三さんの作品をあげたい！ という、不思議な気持ちになりました（笑）。

そして僕はいいよ、池田修三さんの作品をプレゼントするべく、買い求めることになりました。5月某日、本誌1号目の福田利之さん連載「下戸式秋たんぼう」の取材で訪れた、秋田市内の画廊で、たった一枚だけ残っていた池田修三作品に僕は一目惚れしてしまいました。幾つか実物を見たうえで、一番気に入ったものを選ぼう。なんて思っていた僕ですが、最初に出会ったその作品は、僕が買うために残っていたとは思えなかったのです。というのも、そのとき僕がこの絵をプレゼントしようと思っていたのは、僕の奥さんでした。数日後に結婚記念日を控えていた僕は、いつも旅をしてばかりの僕に、文句一つ言わずにいてくれる奥さんへ、感謝の気持ちを込めて、池田修三さんの絵を贈りたかったのです。そんなときに出会ったこの作品。

虹がかかる空を背景に、どこかあきらめにも似た表情で、うっすら微笑む女性の姿が、「はいはい、わかっている、わかっている、どうぞ、どうぞ」と、全てを見通した表情で微笑む奥さんと思事

このリアルを見た気がしました。とにかく手頃なのです。具体的には数千円から、高いものでも3万円ほどという金額だからこそ肩肘張らずに贈り合えたのだと。とはいえです。一般的な商品でなく作品である限り、そうやって需要があるというものは、必然的に値段が上がっていてもおかしくはありません。しかしそれが今もお、価

格が上がらずにあるというのは、単純に作品の価値が低いということなどではなく、間違いなく池田修三という作家の意思がそこにあっただけで、僕は思いました。そしてそれが僕の単なる想像ではない、ということがわかるのに、たいして時間は必要ありませんでした。

に重なってしまいました（笑）。そして僕は、たった一枚のその版画を買い求めたことから、あらためて池田さんの作品の秘密に触れました。身もふたもないような言い方をあえてしますが、その秘密とは、値段がとても安い、ということでした。

さらにその後、別のお店で、7歳になる娘のためにも一枚購入。そこで池田さんの作品の安さ（というより適度さと言った方がいいかもしれません）が、最初のお店に限ったことじゃないということを知ります。このときに僕は、池田さんの作品を贈り合うという



## 作品が飾られるということ

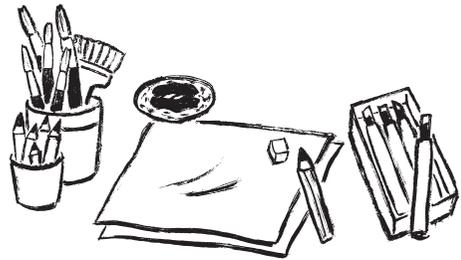
そうやって、はじめて池田修三の作品を購入したことが、僕のなかの池田修三熱に拍車をかけました。我が家に飾られた池田修三さんの版画を眺めながら、僕はあらためて作品が暮らしのなかにあることの幸福について、考えていました。

実は僕は、10年ほど前に、とある雑誌で「日本一、搬入出の多い編集者」と書かれたくらい、頻繁に絵画の展覧会をプロデュースしていた時期があります。当時の僕は、絵描きを目指す若い人たちが、有名な画廊さんがついてくれて、作品の価値（すなわち値段）が上がっていくということを、本当に望んでいるのか疑問に思っていました。作品の値段が上がるとするのは、確かに作家の価値を示す一つのものさしかもしれません。しかしそのせいで、作品を買うことが投資となり、せつかくの作品が、ともすれば人の目に触れることなく、大事にしまわれてしまうということに、作品としての不幸も感じていたからです。

そういった絵画投資に繋がるような美術の世界でなく、また、消費されてしまいうすいイラストレーションの世界でもなく（もちろんそれらが悪いという意味ではありません）、言うなればその狭間で、人々の暮らしのなかに根付いていくような作品、及び、作家の在り方はないものだろうか？ と、必死に模索し、様々なアイデアを実践してみた当時の僕ですが、そのチャレンジが確かな実感をもって「成功した」と思えることは、ついぞありませんでした。

しかし、それを池田修三という人は、秋田という土地で、ふつうにやっていたのかもしれない。僕はそのことにドキドキしていました。作家と作品とそれを買う人々の、誰もが理想とするような幸福な関係が、この秋田の町にかつて存在したのかもしれないということ。そしてそれを僕は確かめたいと思いました。僕は編集部みんなにその思いを伝えます。そして池田修三さんの故郷である、象潟の町に行くことを決めたのでした。





秋田の風土を背負った舞踏家

## 土方 巽 ひじかた たつみ



「痴癡譚」(1972年)を踊る土方巽 撮影：小野塚誠  
写真提供：慶應義塾大学アート・センター

「舞踏=BUTOH」。世界共通語になっているこの言葉を作り出したのは、昭和3年(1928)に秋田市で生まれた土方巽です。昭和35年(1960)ころから前衛的な総合芸術として「暗黒舞踏派」を結成、「舞踏(ぶよう・ダンス)」に対し、反逆的ともいえるスタンスをとっていました。「白塗り、剃髪、裸体」というスタイルで踊り、三島由紀夫や澁澤龍彦などの文化人から絶賛を浴びました。

土方の踊り、舞台美術は秋田の風土そのものでしたが、秋田で一度も公演を行わないまま、昭和61年(1986)に亡くなってしまいました。仙台や盛岡で踊った土方が、なぜ秋田で公演を行わなかったのか。いろいろ言われていますが、あまりに秋田的な土方の世界を生まれ故郷で披露するのは、ためらいがあったのでしょうか。平成26年(2014)10月に秋田県で開催される国民文化祭で、「舞踏・舞踊フェスティバル in AKITA」があり、多くの舞踏公演が見られそうです。

猫と美女、戦争画の間から見えるものは

## 藤田 嗣治 ふじたつぐはる



藤田嗣治「眠れる女」1931年／(公財)平野政吉美術財団所蔵  
©ADAGP,Paris&JASPAR,Tokyo,2012 E0247

藤田嗣治は、旅する画家でした。明治19年(1886)、東京の牛込に生まれ、27歳で渡仏。研鑽を重ね、一躍、パリ画壇の寵児となります。しかし、パリでの生活を捨て、中南米を歴訪。安住の地を持つとしない、漂泊の旅が続きます。そして、昭和8年(1933)、日本に帰国。この頃、秋田の資産家・平野政吉と知り合い、秋田に日本の原風景を見出します。

「秋田に美術館をつくるので、絵を描いてほしい」と依頼され、秋田での壁画制作を決意。制作現場は、平野家の米蔵でした。縦3.65メートル。横20.5メートルという大作「秋田の行事」を、174時間で完成させました。絵にはものすごい躍動感があります。秋田市内の祭りである山王日吉八幡神社祭り、三吉神社の梵天、竿燈が右側に、左側にかまくらや雪国の風俗が描かれています。秋田犬、秋田おぼこ、菅江真澄の墓の近くにある伽羅橋まで顔を出すという念の入れよう。時間を忘れて細部に入ります。この感覚は秋田県人でないと湧いてこないものかもしれません。

美女と猫の「乳白色の肌」、リアリズムに徹した戦争画。このふたつの画業をつなぐのが、1930年代の壁画制作といわれています。なかでも「秋田の行事」の群像表現は、藤田の新境地でした。藤田がどのような思いで、この壁画を秋田に残したのか。大壁画「秋田の行事」が放つ藤田のメッセージを、感じてほしいのです。

「秋田の行事」は、平成25年9月から新秋田県立美術館にて展示される予定です。

## 穏やかな人が

### 多い?!

### 秋田県

秋田県人は穏やかな人が多いとよくいわれます。これは激しい人が多い、お隣青森県・津軽とは大違い。有名文化人だけ見ても、版画家の棟方志功、作家の太宰治や寺山修司、現代美術の奈良美智など強烈な個性を持った人が目につきます。「穏やか」。これは秋田県の風土そのものです。昔から米が豊富にとれたため飢饉もほとんど経験せず、秋田杉、銀、銅などの天然資源に恵まれ、他県に比べるとあまり苦労しないでもなんとかなってきた地域。それが穏やかな気風を育てたといわれます。

このページでは勝平得之と福田豊四郎、土方巽という秋田人と、藤田嗣治という県外人を取りあげました。このうち勝平と福田は穏やかな人柄と作風で、秋田人らしい人でした。特集で取り上げた池田修三も穏やかで控えめな人だったようで、作品に表れています。しかし秋田出身者にも激しい人がいます。舞踏家の土方は「穏やか」とは逆の生涯を送った人でした。歌手の友川カズキも同様です。当然なことですが秋田にも個性があるということ。こんなことを思いながら、秋田ゆかりの表現者に思いを馳せてください。

版画、絵画、舞踏……。それぞれの視点で秋田を愛した表現者たち。

秋田の風景と人にそそぐ優しさ

## 勝平得之 かつひらとくし



秋田風俗十題「いろり」1939年／秋田市立赤れんが郷土館所蔵

秋田市内の紙漉き職人の息子として生まれた勝平得之が版画家になるまでは、何度かの曲折がありました。水彩画を描いたり、「農民美術運動」という芸術活動に影響され、秋田県鹿角郡大湯で木彫り人形講習会に参加、「秋田風俗人形」を制作販売した時期もありました。人形は勝平版画がそのまま木彫りになったような素朴なものです。同時に版画家としても素養を高め、「旭川暮色」など、秋田市内の風景を版画で再現することに着手。その後の10年間、人形制作と版画を両立させ、徐々に農村風景をテーマにした版画作品に傾倒していきます。勝平が31歳の時(昭和10年・1935)、戦時下のドイツから亡命してきた建築家ブルーノ・タウトが、秋田市内の旅館で勝平版画を偶然目にし、それが縁でタウトの著作の口絵を制作依頼されました。タウトは勝平の作品と人柄にほれ込んだといわれています。

勝平の作品をあらためて眺めてみると、千秋公園、川反、通町、八橋、雄物川などの風景や、秋田の生活や行事を描いた版画からは懐かしさを強く感じます。特に秋田県民にとっては、町は違っても、それぞれの子ども時代を思い出すような、同じようなにおいがしてくるのです。かまくら、なまはげ、花火、稲刈りなどの農作業。どれもこれもドキッとするとほど身近で、秋田県民のDNAを掻き立てるものばかりです。これは明らかに未来に残すべき秋田の宝、秋田遺産です。

生涯、心は秋田に

## 福田 豊四郎 ふくだよしろう



「秋田のマリア」1948年／秋田県立近代美術館所蔵

福田豊四郎は明治37年(1904)、秋田県北部の小坂町で生まれました。当時の小坂町は、小坂鉱山を経営する藤田組の企業城下町で、小坂鉱山の銀生産高は、福田が生まれる3年前に日本一になり、鉱山景気に湧き、劇場、病院、鉄道などが次々に建設され、秋田県下で最もモダンな町となっていました。

福田はそのモダンな洗礼を受けて育ったことでしょう。生家は薬局でした。薬だけでなく、生活用品も売る、当時としてはハイカラな店だったようです。

19歳で土田麦徳に師事、その後日本画家の川端龍子の門人となるという道を歩み、中央画壇で旺盛な活動を繰り広げますが、絵のテーマは郷里から離れることはありませんでした。モダンな泥臭さ。それが、福田の絵であり、生涯秋田を愛し続けた画家の心意気です。



「アノネ」1984年

## 第2章 池田修三 をめぐる 旅へ

10月3日(水)

ふたつの目的

取材当日の朝、神戸からやってきた僕（藤本智士）と、アシスタントのはっち（山口はるか）。東京からやってきた写真家の浅田くんと広川くん。さらに秋田編集チームの、ヤブちゃん（矢吹、笹尾さん、田宮さん。そして秋田カメラマンの竜ちゃん（鈴木竜典）という、総勢8人の取材チームが、秋田市市場前に集合しました。なかなかの大所帯ですが、今回このメンバー全員が取材に集中できるのは、実は今日と明日のたった2日のみ。うまくチーム分けをしながら取材をすすめていかないと、池田修三さんの魅力を伝えるどころか、中途半端な結果にもなりかねません。いつも以上に緊張感だらけのような、藤本チームとヤブちゃんチーム、2台の車に分乗して、さっそく象潟へと向かいます。



1時間ほどで「道の駅象潟ねむの丘」に到着。ここ象潟は、紀元前466年の鳥海山噴火により、岩や土砂が海に流れ込んでできた「潟」でした。九十九島と呼ばれる島々を浮かべた風景は、江戸時代、1804年の大地震で海底が隆起して潟が陸地になるまで、「東の松島 西の象潟」と称されるほどの景勝地でした。けれど、田んぼの中にばこばこ丘が並ぶ姿はともかわいらしく、他にはない独特な風景を作っています。道の駅の展望室からそんな九十九島を眺めつつ、僕は今一度今回の取材の目的をみんなと共有します。今回、僕たちが果たしたいことは大きく二つありました。

一つは、池田修三さんの版画が飾られているお家にお邪魔して、暮らしのなかにある池田作品をこの目で実際に見てみるということ。  
もう一つは、池田さんの生家をはじめ、池田さんと繋がりがあった方々を訪ね、池田修三という作家の人となりを知るということでした。

### 顔ハメ看板

そのためにまずは、先述の福田利之さん連載取材の際に一度伺った、象潟駅前の民芸屋さん「くにまつ」にて、あらためてお話を伺うのがいいんじゃないか？ ということに。以前「くにまつ」さんと福田さんと僕は、雪ん子が描かれた池田さんの作品を見せていただき、その作品を手に入れたときのエピソードを聞かせてもらったり、象潟の資料館（にかほ市象潟郷土資料館）

にいる齋藤さんというキーマンを紹介してもらったり、さらには池田修三さんの生家の情報まで教えていただくなど、とてもお世話になったのです。しかし、せっかくなので「くにまつ」さんに向かう

前に、道の駅をしばし探索。そんなとき見つけたのが、松尾芭蕉とその弟子、曾良の顔ハメ看板でした。  
象潟は、松尾芭蕉が訪れた最北の地としても有名なのです。なんだか愛らしいその看板の前に、みんながやたらと「笹尾さんだろ！」なんて騒いでいるので、何のこともか聞いてみたら、アニメの一休さんのごとし、つるりとかわい笑い顔の笹尾さんは、最近みんなから小坊主と呼ばれているとのこと（笑）。そこに描かれた曾良の絵がまるで小坊主のようだというので、早速、芭蕉ヤブちゃん&小坊主笹尾コンビで記念撮影。



いやあ、確かにはまってる(笑)。だ  
けどこの、ちょっとしたお遊びが、最  
後に待ち受けているミラクルの前兆  
だったとは、当然このときの僕たちに  
はわからないのでした。

### 「くにまつ」

午前10時を過ぎ、最初の目的地、象  
潟駅前にある「くにまつ」へ。お店の  
奥さん、國松滝子さんに、前回の取材  
のお礼を伝えつつご挨拶します。

一同 こんにちは。

藤本 以前、池田修三さんのことでお  
世話になりました。

國松 あらっ。

藤本 その節はありがとう、ございまし  
た。



國松 これ(『のんびり』)を見たん  
だと思えますけど、何か池田さんに關  
するグッズっていうか、絵はがきとか  
ね、そういうのいいますか? って来  
られた方がいて。

藤本 そうですか。

國松 そう言われれば、そういうの全  
然考えたこともなかったけど、他所に  
行くと、その町から出た人の記念館な  
りなんなりね、その町の文化遺産とし  
てあるんだなと思ってね。で、あのと  
きお話しした、資料館の(齋藤)一樹さ  
んに早速電話したの。「今日こういう  
人が来たんだよ」って。で、せっかく  
ね、わざわざ来られたのに、なんにも  
ない。この町の人たち何してたんだろ  
う? って。だから、「一樹さん、あ  
なたが市役所にいる間になんとか頑張  
って」って言ったんです(笑)。

藤本 実は僕たちも今日齋藤さんにお  
会いする約束をしているんです。

國松 そうですか。ぜひよろしくお願  
いします。

藤本 あの、もしよければ、今回も雪  
ん子の作品を見せてもらえませんか?

國松 はい、いいですよ。今は時期で  
はないので、しまつてあるから、ちょ  
っと出してきましたね。

藤本 すみません。

藤本 あっ、いい写真だあ!  
國松 これが、やっと1歳のときです。  
一同 かわいいく!  
國松 こっちは5歳のとき。  
藤本 おおっつ! いいなあ。こうい

う風に、池田さんの作品ひとつひとつ  
に、それぞれのエピソードがあるんで  
すねえ。  
國松 まさかね、こんなことになるな  
んでね。



藤本 この絵は確かおじいちゃんが買っ  
てきてくれたんでしたよね?

國松 そう。この作品が1984年。

1982年にうちの双子が生まれてた  
ものですから、公民館で展示会をやっ  
たときにね、うちの双子のようだつて、  
おじいちゃんが買ってきてくれたんで  
す。

藤本 お子さんは今どちらにいらつし  
やるんですか?

國松 東京と山形にいます。

藤本 そっか。会いたかったなあ。

小さい頃の写真とか、ないですか?

國松 うちの子たちの? いや、まあ、  
ありますけどね。

藤本 あります!? 2人一緒に写つて  
るような。

國松 このぐらいのときの?

藤本 ええ。でも今すぐ出てくるよう  
なものではないか……。

國松 いや、ありますけど。

藤本 ほんとうですか。ぜひお願ひし  
ます。

一同 (笑)

藤本 でも、ここから盛り上げていき  
たいですね。あつ、これ、象潟の観光  
ガイドですか?

國松 そうです、どうぞどうぞ。夏の  
間中、私、観光案内してました。

矢吹 そういうこともされるんですか?

國松 今、駅が工事中でしょう? 中  
に観光案内所があるんだけど、閉鎖し  
てるから。その間は、駅前にあるもの  
の責任としてね。

藤本 このガイドにも、全く池田修三  
さんのことが載ってないですね。

國松 だから、ほんとにこの辺りの人  
たちは知っても、ちょっと隣に離れ  
てしまえば知らないと思うし。ただ、  
町の広報の表紙になったときは、こう  
いう人がいるんだなってなつてたかも  
しれないですけどね。で、その広報の  
表紙で池田さんの絵の下に、詩がつい  
てたのね。その詩を書いた詩人の方が  
まだ元気なの。

藤本 ほんとうですか!?

國松 それで私、一樹さんに言ったの  
よ。あの先生もまだ元気だしね、あの  
ときの広報の資料をまとめて、また発  
行することはできないのか? って。  
一応、その先生が自分で本にされて、  
出したみたいですけどね。そういうの

はご覧になってないですか?

藤本 まだ見てないです。

國松 そうですか。今川洋先生<sup>よち</sup>つて言  
つて、もうリタイアされてますけど、  
保育園の園長先生だったんです。その  
先生ね、お話がとっても好きな方なの  
で、喜ぶと思いますよ。良かったら、  
こちらに電話して聞いてから行ってみ  
てください。

藤本 ありがとうございます。



國松さんのおじいちゃんが、孫を思  
い、買ってくれたという作品の話を知  
いて、僕は、池田修三さんの作品の価  
値は、そこに付随するエピソードと共  
にあるのかもしれない。ふと、そんな  
風に思いました。そして僕たちは、さ  
らにもっと、暮らしのなかで今もなお  
生きる池田修三作品に出会いたいと、  
近くを歩いてみることにしました。

## 市議会議員の竹内さん

平日の朝、決して人通りが多いわけでもない、象潟の町で、たまたま自転車を押していたおじさんに声をかけてみます。

**藤本** 池田修三さんの作品を飾られているお家にお邪魔して、そのエピソードなんか聞いてまわってるんです。  
**おじさん** 池田さんの生まれた家はあつちなんですけどね。

**藤本** 池田医院には、実は今日の13時に伺うことになっていて。

**おじさん** そうですか。

**藤本** 資料館にも夕方行くことになってるんです。



**おじさん** 今の資料館の学芸員の齋藤一樹さんもいいけど、もっと前に勤めてた横山正義さんも詳しいかもしれないですよ。私と同じ74歳ですけども。  
**藤本** 横山さんの連絡先わからないですかねえ？  
**おじさん** 電話番号が。待ってな。よしっ。

—電話をかける—

**おじさん** 横山さんですか？ 私、武道島の竹内賢です。こんにちは。お父さんいらっしゃいますか？ 山行った？ どこ？ ほんと。せばよ、何時頃帰ってくる？ というのは、今、若い人たちが版画の池田修三さんのこと、象潟に取材に来てるんですよ。で、そなたに詳しいのは正義さんだということ、資料館さんも行ぐんだけど、資料館の一樹さんだけでなく、正義さんからも聞いたらいいんでないかと思ってよ。15時か。わがった。んだ。いずれ、秋田県を売り出すっていうことで『のんびり』っていう雑誌を作ってる若い学生の人たちが……。

**一同** (笑)  
**藤本** 学生みたいな大人です。  
**おじさん** そうか、まず資料館だな。わがった。ありがとう。はいはい。



—電話を切って—  
**おじさん** ちょっと山さ行っただよ、ま、資料館行けば、だいたいのことわかると思う。

—名刺交換を—

**藤本** 竹内賢さん。……あら？ 市議会議員さん。

**竹内** 私は、あの、全く毛並みの違うあれですから。

**藤本** この町の人たちにとって、池田修三さんってどんな感じなんです？ 観光案内とか見ても載ってないし。

**竹内** うーん。若い人たちは、ちょっと。なんていうか、離れてるでしょ。私たちは、象潟町の中央で活躍してたっていうことで、親しみっていうか、尊敬っていうか。そういうのがありますけども。今の若い人はどうかなあ。

**藤本** お父さんは絵はお持ちじゃないですか？

**竹内** 私は持ってないです。芸術とかそういうものには縁遠いんで。(はにかむ)

**一同** (笑)

**藤本** 僕らは県外の人間ですけども、池田修三さんの作品がすごく好きで。

**竹内** そうですね。

**藤本** それでこの町にやって来ても、ポストカード一つないから、結局何も見られなくて。もうちょっと池田修三さんの町なんだっていうことで、この町を盛り上げることもできるはずなのになって思っているの。またご提案させてもらったり、お力お借りしたりできれば嬉しいなと思います。

**竹内** ありがとうございます。いや、あれだもんな。観光とか町づくりっていうことで、いろいろやってるんですけども、池田修三さんをメインにして売り出すっていうことは考えたことがなかったですね。

**藤本** ぜひよろしくお願いします。ごめんなさい、引き止めて。ありがとうございます。

**竹内** どうぞ気をつけて。

## 山形屋旅館

聞き込みを始めた途端に出会ったのが、市議会議員の竹内さんとは、なんだか幸先がよい空気が。さらに駅前通り沿いにある、山形屋旅館という小さ

な旅館が気になったので入ってみると、やっぱりありました！ 旅館の壁にいくつかの池田作品が。旅館を営む村上正勝さん(67歳)、孝子さん(61歳)にお話を伺います。



**藤本** たくさんありますけど、どれが一番お気に入りですか？  
**孝子** 私が好きなのは、やっぱり鳥海山のね。  
**正勝** 晩年になったら大きいの刷れなくなっただよ。だから鳥海山のを買わせてもらったとき、これ以上大きいのは刷れないって。

**藤本** 作品って、いつも自分で買われるんですか？

**孝子** 買ったのは、この鳥海山のだけじゃないかな？ あとは全部新築のときにいただいたんです。もらって嬉しいですよね。

**藤本** そうですねえ。

やっぱりこの町の人たちにとって、池田さんの作品は、とても大切なものなのだとさらに実感。最後に、正勝さんと孝子さんご夫婦に、それぞれお気に入りの絵を持っていただいて撮影。ここに陽気なご夫婦。素敵でした。



なまこ ゆう  
海鼠釉が目を引く  
秋田の焼き物



## 楢岡焼

ならおかやき

楢岡焼の歴史は140年ほど。現在も続く窯元として、秋田県で一番古い伝統を持っています。かつては水入れの大瓶をはじめ、さまざまな生活雑器を焼いていましたが、時代の変化と共に食器中心の焼き物づくりに変わり、たくさんの人々に親しまれています。独特の青白い色をした海鼠釉をただで、多くの人は楢岡焼と判断できます。使う土は地元の土にこだわり、秋田の風土に根差した、秋田県民に親しまれる日用雑器。これが楢岡焼の自慢です。

場所：大仙市南外

武家屋敷が  
ある町の手技

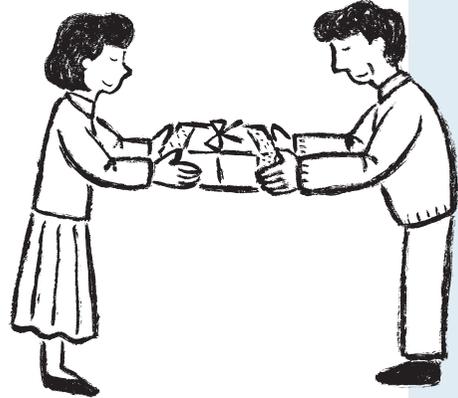


## 樺細工

かばざいく

秋田における樺細工の伝承ルートは確認されていません。一説には、樺細工の技を持った京都の修験者が秋田の阿仁地方に移り住み、門外不出とした技術を、その後、角館と大館に伝えたという話もあります。樺とは桜の樹皮をいう言葉の一つで、薄く剥いだ樹皮を筒状の木地に膠を使って貼り、磨きあげて完成となります。独特の技術は高度なもので、その技術に裏付けられた作品の美しさは絶妙です。国の伝統工芸品にも指定されている、角館の町を語るには欠かせない工芸品です。

場所：仙北市角館



## 秋田県民に長く慕われ 愛され続けてきた贈り物

今号の「池田修三という、たからもの」は、版画家・池田修三の徹底特集ですが、池田さんの作品は銀行のノベルティグッズに使用されたほか、贈答品として購入されたケースも多かったようです。値段も数千円のものから1〜2万円程度のものが中心で、当時の物価からいっても、手に取りやすい価格設定だったと思います。ほかにも秋田には「贈り物」の定番がたくさんあります。「稲庭うどん」のような食べ物もありませんが、いつまでも手元に残る、民芸品として秋田県民に長く慕われてきたものがよく利用されます。多くは江戸時代から続く生活用具が、時代の流れと共に技術の向上、デザインの洗練、地域を超えた販売力確保などの要素が加わり、評価されてきました。東京の一流デパートの店頭を飾るものも多くあります。ここでは、秋田の選りすぐりの材料と手技の結晶をご紹介します。

食器から  
仏壇まで

## 川連漆器

かわつらしっき



川連漆器の歴史をたどると、800年前にまでさかのぼります。農民の内職としての武具の漆塗りがその始まり。400年ほど前からお椀づくりが主流になり、これが現在の川連漆器のものとなっています。国の伝統工芸品にも指定され、全国有数の漆器生産地となった今、200社近い漆器会社が技を競っています。製品は普段使いの食器ばかりでなく、蒔絵や沈金を施した高級品からインテリア小物、大きなものは仏壇までと範囲は広く、イタリデザインとのコラボも話題となりました。

場所：湯沢市川連

山の中の素朴さ

## 木地山こけし

きじやまこけし

秋田県にある伝統的なこけしには、湯沢市の川連こけしと木地山こけしがあります。どちらも木地山系といわれ、頭と胴が一体となった作りとなっています。そのため首は太目で、絵柄の特徴として大きく垂れた前髪、胴には前掛けと菊などの花々が描かれていることがあげられます。工人は川連に多いのですが、名人といわれた木地山の故・小椋久太郎さんのファンは今でも多く、骨董店などで旧作を探しているそうです。

場所：湯沢市川連、湯沢市皆瀬



日常使いできる  
一生もの

## 生駒塗

いこまぬり



目に鮮やかな透明感のある朱色、しっとりとした手になじむ厚手の生地、これが生駒塗の印象です。製作するのは親子2代に渡り漆芸に取り組んできた「生駒漆芸工房」。父親の生駒弘さんは、沖縄の琉球漆工芸の職能向上に務め、のちに息子の親雄さんが秋田に開いた工房で、ともに技術研鑽に努めたそうです。地域として工芸に取り組み特産品でないため生産量は限られていますが、技術の高さと丈夫な使い勝手の良さから、全国の愛好家から高い評価を受けています。

場所：秋田市

洗練された  
デザインを使いこむ

## 大館 曲げわっぱ

おおだてまげわっぱ



薄い径目の天然秋田杉を曲げて筒状にし、山桜の木の皮で縫い留め、底板や蓋を付けたもの。奈良時代からあったようですが、江戸時代初期、秋田藩・佐竹西家が、藩の下級武士に手内職として奨励したものが、今の原型となっているようです。日本各地にヒノキ、青森ヒバなどを材料にした「曲げ物食器」がありますが、この大館曲げわっぱだけが国の伝統工芸品指定を受けています。近年は斬新なデザインや、技術向上により、非常に高い評価を受けています。

場所：大館市

鉾山県で花開いた  
緻密で繊細な  
技の結晶

## 秋田銀線細工

あきたぎんせんざいく



秋田は古代より金銀の産出が豊かで、古くからこれを利用した手工芸が発達しました。武具や装飾品の加工によってその技が高められ、現代にも受け継がれているものも多くあります。

なかでも銀線細工は、太さ0.2〜0.3mmの純銀の線をより合わせて、指先だけでつくり上げられる、とても繊細なものです。独特の線形と銀ならではの落ち着いた色合いがかなで、目を見張るような美しい世界に触れてみてください。製品はブローチ、イヤリング、ペンダントなど多種類あります。

場所：秋田市／撮影協力：竹谷本館





「カナリヤ」1994年

第3章

池田修三  
に近づく

ひとやすみ

気づけばもうお昼ということ、ひとまずお昼ご飯を食ながら一休み。そこで、秋田編集チーフのヤブちゃんがあらかじめ段取りしてくれた、今日の流れを確認します。

【本日の予定】

13:00 修三さんの生家である、池田医院にお邪魔させていただく。  
16:00 にかほ市象潟郷土資料館の齋藤一樹さんにお会いする。

以上！ ということで、その合間に、いろいろ聞き込みをしたり、あらたな動きを進めていこうということに。そうこうするうちに、午後1時はすぐによってきました。

池田医院

奥さんが出迎えてくださり、池田医院の奥にあるお住まいへと上がらせてもらうのんびりチーム。生家にあった250点もの作品は、すべて、にかほ市象潟郷土資料館のほうに寄贈されて



いるのですが、それでも、仏壇の横に仏版画が飾られていたり、衝立の真ん中に修三さんのモノクロ作品が貼られていたり、そこそこ作品が飾られていて、僕たちは興奮を隠せないでいました。奥で待っていてくださったのは、池田医院の院長先生で、修三さんの甥っ子さん（修三さんのお兄さんの息子）にあたる、池田左千雄さんでした。

一同 こんにちは。お邪魔します。

藤本 先日は突然伺ってしまつてすみませんでした。

左千雄 いえいえ。

藤本 左千雄さんと修三さんが一緒にここに住まわれていた時期はいつ頃になりますか？  
左千雄 実はほとんど一緒に住んでいなかったんです。由利高校で教えていたときに、1年くらいここにいたのかな。

藤本 そうなんです。池田さんのことをよくご存知な方はどういふ人になるんだろう。



奥さん 横山さんはいかがですか？

矢吹 横山正義さんですか？ 市議会議員の竹内さんという方がさつき教えてくださったんです。

奥さん 横山さんの奥さんがまた、修三さんの版画を好きで。

藤本 すぐお近くですか？

奥さん 4、5軒隣に。藤本 ほんどですか。じゃあちょっとご連絡してみよう。

奥さん ええ、なんか玄関にも飾っていたらいいように。

藤本 きつと、この町には池田さんの作品を家に飾ってる方がたくさんおられますよね。

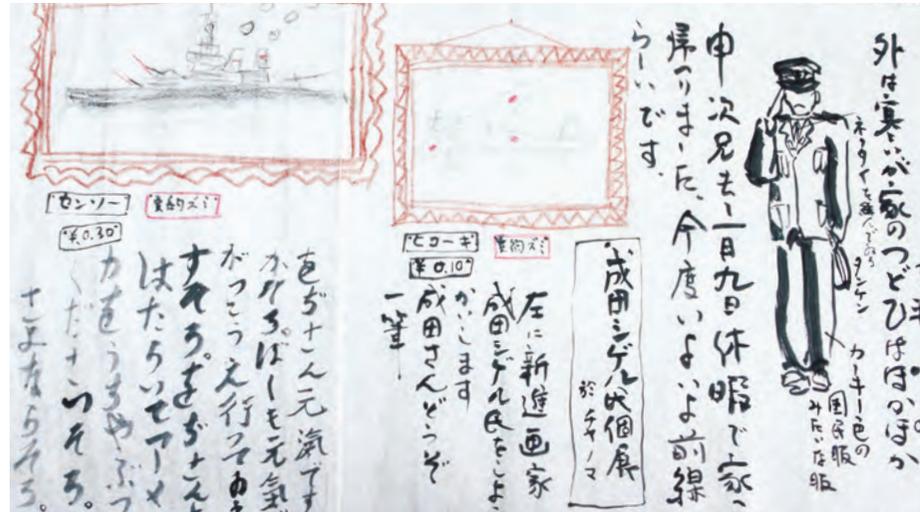
奥さん そうですね。わりと安いというか、適当な値段で買えるっていうことでね、みなさん。

藤本 それこそ、画商さんからするともっと価格を上げたらっていう話はき



つとあったと思うんですけど、ご自身  
が上げなかつたっていうことですね。  
左千雄 うん。  
奥さん 「広く持っていた方がいい」  
っていうことは言ってもらっちゃいまし  
た。  
左千雄 欲のない人で(笑)。  
藤本 作品以外で、修三さんがこのお  
家に残されたものってあったりします  
か？  
左千雄 手紙があるかな？  
藤本 えっ！  
奥さん 主人の父(修三さんのお兄さ  
ん)が戦争に行ったとき、手紙を書く  
って、巻紙みたいなものいろいろと  
書いて。  
藤本 それはちよつと、ぜひ！  
奥さん 探してきましょう。

藤本 うわっ！ すごい！  
奥さん (笑)  
藤本 絵が入ってる！ え  
いと、20年1月15日……。  
奥さん 全部、修三さんの  
字ですね。  
藤本 へ〜！ 左千雄さ  
ん、このときは？ 昭和20  
年だから……。  
左千雄 生まれて半年です  
ね。  
藤本 そうか！ まだ赤ち  
やん！ これはつまり、左  
千雄さんにとってはお父さ  
ん、修三さんにとってはお  
兄さん、に向けての手紙。  
左千雄 ええ。こうして残  
つてるところをみると、結  
局、出せなかつたんだと思  
うけど。  
藤本 修三さんはいくつだ  
つたんでしょう？ 昭和20  
年で、大正11年生まれだから……。24  
くらいかなあ。それにしても、いい字  
だし、絵も素敵だし。なんだか温かい  
というか、ユーモアがあつて、ほんと  
いいなあ。  
奥さん あの……イチジク召し上がり  
ます？



藤本 え〜！ すごい！ イチジク  
の甘露煮だ。奥さんが作られたんです  
か？  
奥さん ええ。  
矢吹 いま一番旬の時期ですよ。  
奥さん そうですね。出始めたところ  
ですね。

### お墓参り

池田医院を後にした僕たちは、生家  
でお話を聞いたことで、ほんの少し修  
三さんのお人柄を知れた気がするのだ  
でした。そんなとき、池田医院のちよう  
ど目の前に改装中の建物があることに  
気づきました。後々知るのですが、こ  
の建物は、象潟公会堂という、昭和9  
年に建てられた木造2階建ての建物で、  
改装中ながら、近代洋風建築の雰囲気  
がなんとも素敵でした。生家の目の前  
ということもあり、僕はここで修三さ  
んの展覧会ができないものかと、一人  
考えていました。

さて、なんだかイチジクを食べに来  
ただけのような、福田さん澁谷くんコ  
ンビのタイミンクの悪さをひとしきり  
みんなど攻めたのち(笑)、これから  
また連載取材のために別行動すること  
になる福田さんたちも一緒に、池田修  
三さんのお墓参りをすることにします。

蛸満寺は、象潟にある曹洞宗の寺院  
で、松尾芭蕉の『奥の細道』にも登場  
する立派なお寺。広い境内の一番奥  
に、池田家のお墓がありました。そし  
てそこには確かに修三さんの名前が刻

藤本 うわ〜、美味しい〜！  
一同 美味しい！  
―そこへ福田利之さん&のんびりデザ  
イナーの澁谷くんが登場―  
福田 すみません。先日はありがとう  
ございました。  
左千雄 いえいえ。  
藤本 すごいタイミングで来ましたね  
(笑)。あの……修三さんのお墓って  
どちらにあるんですか？  
左千雄 うちのお墓に入ってます。  
藤本 ということは、象潟に？  
左千雄 ええ。蛸満寺ですけども。  
矢吹 蛸満寺なんですか！  
笹尾(小坊主) 有名なお寺。  
藤本 ご住職に聞けば分かりますか  
ね？  
左千雄 ええ。  
まっすぐ行って  
一番奥ですね。  
藤本 なるほど。  
行ってきます！



まれています。春には菜の花が広がる  
という、そのお墓はとても素敵な場所  
で、僕は手を合わせながら心のなかで  
修三さんに、見当違いな歩みをしてい  
ないか聞いてみました。もちろん何か  
返事があるわけじゃないけれど、確か  
に静かな風が頬を抜けて、僕の胸の内  
に何か温かいものがこみ上げてきまし  
た。とにかくやりきってみよう。僕は  
心に決めました。

### にかほ市象潟郷土資料館

福田さん澁谷くんコンビとはここで  
お別れし、にかほ市象潟郷土資料館へ  
と向かいます。そこには、創刊号福田  
さん連載でのイラストのとおり「俺に  
まかせろ！」な学芸員の齋藤一樹さん  
が待っていてくれました。



俺にまかせろ

前回福田さんと伺った際は、時間がなく見せていただけなかった収蔵庫の作品たちを、今回はたっぷり見せてもつかの作品を見せてもらった僕たちですが、250点以上もある修三作品を一気に見ることができるといふことに、ワクワクが止まりません。いよいよ開いた収蔵庫の扉の向こうには、額装され、丁寧に箱に詰められた作品たちが、大量に積み重ねられていました。

藤本 ひゃー！ うわっ これなんかもう！

矢吹 わー、初期のだ！

笹尾 かわいいく！

齋藤 それで、これ。最近見つかったんです。ゼーんぶの作品のリスト。自分です。

藤本 ええー！ー！ー！ す、すごーい！

浅田 これやばいなあ。

藤本 その都度つけてたのかな？

齋藤 そうだね。これ3冊あってね。



藤本 うわー……。これ、きっちり複製せなあかんのちゃう？

広川 ですね。全部複製したいですね。

藤本 これ池田さんからですか？

齋藤 そう。東京の親族から送られて来たそう。私もこれを見てびっくりしてねえ！ こおくれはいいなああって。藤本 うわーこれはすごい。これ前回



来たときはなかったですよ。僕らほんとにきちんと作品集というか、池田さんの仕事をまとめたくて。それで、池田修三さんの町ってことで、この象潟に人がいっぱい来るようにしたいんですよ。

齋藤 ああ、いいですねえ！ 私たちの持つてる版画はね、寄贈いただいたものですかから。そういうものを載せて図録作ってもね。聞いて、大丈夫ならば私いいと思うんですよ。

藤本 ねえ！

齋藤 私ね、昔たまたま象潟の広報を担当したんですよ。

藤本 おいくつときですか？

齋藤 20代、まだ役場のアイドルと言われたところで(笑)。

一同 (笑)

齋藤 私は途中から担当になったんだけどね、池田修三さんの版画を使わせてもらおうと言った人が、いま、福祉部長の細矢。細矢さんはね、池田修三さんの版画とのコラボを始めた人なので、細矢さんに話を聞かれるといいですよ。池田さんに何回か会ってるし、

齋藤 みなさんね、カレンダーの池田修三さんのところを切り取って額に入れたりしてね。

藤本 なるほどなあ。

齋藤 だから、けっこう象潟の町の人たちには馴染みがありますよね。一家に一枚くらいはあるんじゃないかな？ 私も新築のときに友だちから池田さんの作品をいただきました。池田さんの版画って、そういうプレゼントとしてやりとりしてね。そんな高くないですよ。

藤本 そうですね。このまま値段を上げたくないな。あの、僕たち、池田修三さんの展示会をしたいと思ってるんです。

齋藤 池田修三さんの生家の前に公会堂ありますでしょ。

藤本 ありますね。今、耐震工事してました。

齋藤 昭和9年くらいにできた建物で。あの中が木造でけっこうおしゃれですよから。

藤本 ですよ！ あそこでできればいいなあと思ってたんです！

齋藤 あそこいいと思いますよ。我々ね、今のところ展示をやる予定はないんですよ。だから、そういう機会があるならばぜひ。



「広報きさかた」の昭和60年4月～昭和62年3月までの表紙に池田修三さんの作品が使われた。



家も近所でしたからね。  
藤本 それは絶対に会わないと。あとこれこれ！ この詩集の今川洋さんにもお会いしなきゃ。これは、今川さんご自身が自費出版で作られたっていうことですよ？  
齋藤 そうですね。ちなみに細矢さんは、池田さんの作品を使って象潟町民用のカレンダーを作ったんです。全戸配布したんですよ。  
藤本 へー！

あまりの興奮に時間を忘れてしまったのか、いつのまにかすっかり日も暮れたので、夕ご飯を食べて帰ろうと、齋藤さんに「八千代寿し」というお店を教えてくださいました。なんだか高級な店構えて、少々ひるんだもの、たった1日にして、実り多い取材ができたことに気が大きくなっていったのか勇ましく店内へ。すると今度は、赤絨毯がまっすぐ奥へと延びているもんだから、今一度ひるむみんな(笑)。けれども一度勇気を振り絞って奥の個室へ。実は齋藤さん、何をいくつ頼むといいと、注文の仕方まで細かに教えてくれていたので、そのとおり、お寿司と唐揚げとサラダを人数×1/2で注文。結果かなりのボリュームだし、最高に美味しいし、大満足！ そしてドキドキのお会計は、なんと一人あたり1000円で済みました。すごい！ いやあ、いい町だなあ、象潟。



鉱物マニア垂涎の館

7 秋田大学  
鉱業博物館

あきただいがく  
こうぎょうはくぶつかん



かたい博物館の代表格。世界でもまれな鉱物や化石、鉱山、石油など地下資源専門の博物館です。展示品は固いのですが、鉱物から放たれる魅力は、地下からの豊かな贈り物。いくら見ても飽きることがない、この博物館は秋田県の宝ものです。展示品数は約3,300点。多くは秋田大学工学資源学部(旧鉱山学部)の先輩たちが、世界各地の鉱山などで採取し、プレゼントしてくれたもの。ジオパークやシェールガスが話題になっていますが、原点はここにあります。

場所：秋田市手形字大沢 28 番地の 2 / TEL：018-889-2461

江戸時代の紀行家が  
ここで待っています

5 菅江真澄  
資料センター

すがえますみ  
しりょうセンター



今から200年ほど前、北東北と北海道を旅して歩いた菅江真澄。生涯の多くを秋田藩内で過ごしました。真澄は200冊以上の本を残しましたが、そこには2,400枚にも及ぶ彩色図絵が描かれています。それは200年前の秋田を知る、真澄からの極上の贈り物。柳田國男が「民俗学の祖」と呼んだ真澄は、謎の多い生涯を送りましたが、ここは真澄の世界に興味を持ち始めた人にうってつけの施設となっています。ここに来て、真澄の世界にたっぷりと触れてください。

場所：秋田市金足嶋崎字後山 52 / TEL：018-873-4121

秋田の『資料館・博物館』  
歴史ものからマニアックなものまで。  
心くすぐる資料館や博物館がまだまだあるんです。

世界一の太鼓を  
叩くことができます

3 大太鼓の館

おおだいのやかた



「牛の一枚皮を使った世界一の和太鼓」という、少しややっこしいですが、間違いなくギネス認定となっている「綴子の太鼓」を収納。そのほか、世界40か国、約140個の太鼓が展示されています。太鼓の本場アフリカをはじめ、アジアや南北アメリカなどの太鼓がところ狭しと並べられています。なかでもタイのクローン・エーという木製の長い太鼓が目を引きまします。ほとんどの展示太鼓を叩くことができるという、うれしい博物館です。

場所：北秋田市綴子字大堤道下 62-1 / TEL：0186-63-0111

現役最古級の  
芝居小屋はまるで博物館

1 康楽館

こうらくかん



小坂鉱山を経営する同和ホールディングスの前身だった藤田組が、鉱山関係者の娯楽施設として、明治43年(1910)に建設した芝居小屋。今でも現役の劇場として連日お客さんが観劇を楽しんでいます。人力の回り舞台・せり上がり(すっぽん)や、花道、役者の落書きがある楽屋、棧敷席など黒子のガイドにより奈落の底まで見学できます。施設全体が明治・大正の芝居小屋をそのまま伝えてくれる、生きた歴史博物館となっています。ここで芝居を観ながら、芝居小屋の歴史を感じてください。

場所：鹿角郡小坂町小坂鉱山字松ノ下 2 / TEL：0186-29-3732

男鹿のなまはげ  
60面がお出迎え

4 なまはげ館

なまはげかん



男鹿半島の「なまはげ」面は、本来は杉の木やその樹皮、竹製のざるなどに色を塗ったり色紙を貼ったりし、髪の毛は馬のたてがみやモクと呼ばれる水草でつくるなど、個性的で魅力あふれるものです。集落ごとに形状は違って、数は60種以上。その大半の面をここで見るすることができます。また上映される動画で、民俗行事としてのなまはげを、その場にいるような迫力で感じることができますし、隣接する「男鹿真山伝承館」では、なまはげ行事のしきたりを見学できます。

場所：男鹿市北浦真山字水喰沢 / TEL：0185-22-5050

日本一のストーンサークルを  
ここで実感

2 大湯ストーン  
サークル館

おおゆストーンサークルかん



ストーンサークルは日本語で環状列石という縄文時代の遺跡で、有名なイギリスのストーンヘンジのような記念物です。広大な遺跡からは墓や生活の痕跡が発掘されていて、折りと記りの場だったと考えられています。博物館内には、この遺跡から出土したさまざまな発掘品が展示されているほか、大湯環状列石そのものを教えてくれます。世界遺産候補の一つになっている遺跡ですが、4,000年前の人々の、自然を怖れ敬った暮らしぶりをここで体感してください。

場所：鹿角市十和田大湯字万座 45 / TEL：0186-37-3822

秋田の特色が  
たっぷり資料館

秋田県の資料館や博物館について、改めて見渡してみました。秋田は米どころ、酒どころであり、鉱業や林業、農業が盛ん、秋田犬、比内鶏をはじめとした地鶏が多い、自慢の自然もたっぷりあるなどの特色が、博物館のタイプに色濃く反映されています。逆に少ないのが個人顕彰館です。お隣の岩手県だと宮沢賢治や石川啄木をはじめとした有名な人の施設が大変多くあります。このあたり、個人を押し出すことを嫌う、秋田らしい奥ゆかしさでしょうか。そんなことを思いながら、秋田にある130館以上の資料館・博物館から、できるだけタイプの違う、他県でほとんど類似施設を見ることができない所を選んでみました。

餅の展示では世界一

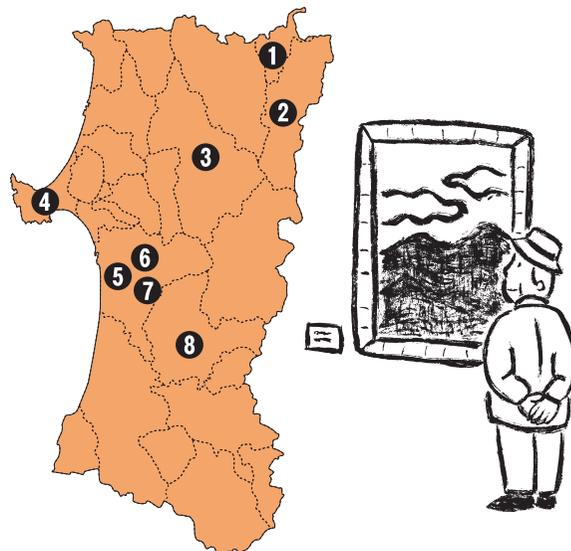
8 民具資料館  
餅の館

みんぐしりょうかん  
もちのやかた



県内陸部は昔から餅の食文化が盛ん。神様へのお供え、祭り、家での年中行事、おやつ、日常の食事など、さまざまなタイミングで登場します。そのような餅文化を伝えるのがこの資料館。県内のみならず、全国から400点以上のユニークな餅が集められています。隣接する「みずほの家」では月に2回「餅つき道場」という餅つき体験イベントも開催され、見て、知って、食べて、餅を堪能することができます。

場所：大仙市板見内一ツ森 418 / TEL：0120-152-683 柵の湯





「あかいとり」1986年

## 第4章 池田修三 に触れる

10月4日(木)

取材2日目にして最終日。朝9時に再び「道の駅象潟ねむの丘」に集合したのんびりチームは、引き続き、秋田の人たちの暮らしのなかにある修三作品を大捜索するべく、昨日同様2チームに別れます。まず藤本チームは、修三さんの遠い親戚にあたる柴田<sup>しばた</sup>莞さんという方のお家へお邪魔させていただくことに。実は、昨日伺った池田医院の奥さんが、あの後、何度もお電話でさらなる情報を教えてくださっていたのです。一方のヤブちゃんチームも、同じく奥さん情報を元に、池田医院の4、5軒隣にあるという横山さんのところへ行ってみることに。

### 柴田さんの贈り物

ということと一旦ヤブちゃんチームと別れた藤本チームは柴田家へ。ご主人の莞さんはおられなかったものの、奥さんが家が上がらせてくださったので、そこで僕は決定的なものに出会います。それはこの箱でした。



藤本 えっ!? これは……修三さんの作品?

柴田 これは、主人の退職のときにみなさまに贈り物に。

藤本 みなさんにこれを。

柴田 配ったんです。

藤本 うわあ、すごい。綺麗に包装された状態で残ってるんですね。

柴田 いろんな絵を200枚ほど配りました。その余ったやつですね。

藤本 ええー!

柴田 でもほら、いつかまた誰かにあげる

ことが(笑)。藤本 そうですよ! まさにそういうお話はよく聞いてたんですけど。現物をこういう風に見るのは初めてで。こんなのいただいたら嬉しいよな〜!! 笹尾 絶対嬉しい!

藤本 ぜひ大切に使ってください!

いやあ、感激でした。修三さんの作品を贈るという文化が、確かにこの町にあったという決定的な証拠を、僕は柴田さんの家で思いっきり見せつけられました。池田修三という作家は、間違いなく秋田を、いや、日本を代表する作家です。それは、作品そのものの評価以上に、作家と作品を取り巻くその環境の素晴らしさに価値があるのかもしれません。真摯に作品を作って生きていく。そのシンプルな行為を続けていく術を、世界中の作家たちが模索しつづけるなかで、池田修三という人は、その一つの答えをここに象潟で体現していたのです。そして僕たちは、再びヤブちゃんチームと合流(こちらも素敵な出会いがあったようです。それはのちほど……)し、象潟の町と池田修三さんの幸福な関係を作った張本人にお会いするべく、にかほ市役所仁賀保庁舎へと向かいました。

約束の午前11時、にかほ市役所で待っていてくださったのは、にかほ市の市民福祉部長をされている細矢宗良さん。象潟の町でこんなにも、池田修三さんの作品が愛されたその大きなきっかけとなったのが、「広報さかさた」の表紙。この表紙に修三さんの作品を使いたいと思ったその人が細矢さんでした。今からお届けする細矢さんのインタビューで、僕たちはようやく、池田修三さんの人となりにハッキリと触れることができたような気がします。ぜひぜひ読んでください。

**細矢** 私が当時の象潟町役場に職員として採用になったのが昭和56年。です。すぐ広報担当を任命されて。最初は広報係長がいたんですけど、2年くらいして全部私一人で編集から取材までやるようになったんです。

**藤本** へ〜！  
**細矢** そんななか、どうしても毎年お正月号だけはカラーで作りたいうことで、池田修三さんの版画など使えないだろうか。それで広報委員長が修三さんをお願いしてくれて。そして「いいよ」ってすぐに版画を一枚送ってきてくれたんですよ。実は、当時の広報委員長も修三さんも私も、同じ町内だったんです。

**藤本** なるほど。  
**細矢** 池田さんの生家と同じ町内会で、私の母親は高等学校時代に1年くらい修三先生に習ってるんです。あと、今



は亡くなっちゃったんだけど、修三先生の甥っ子、池田医院の左千雄さんの弟が同級生で。そういうこともあって、かなり近くやりとりできるようなになりました。で、一人で16ページの誌面をやるって大変なものじゃないですか。  
**藤本** そうですよ。  
**細矢** なので、できるだけシリーズ化していきなかつた。それで、正月号で版画がすごく好評だったから早速、修三先生に「今後も表紙に版画を提供していただけないですか？」って言ったから「いいですよ」って。しかもすぐに1年分を送ってくれたんですよ。ただ、版画だけではなんか物足りないっていうことで、秋田県の芸術選奨を受けた象潟の今川洋さんのところに「これに詩をつけてくれませんか？」って、版画を持っていったんです。今川先生には、前に随筆を2、3回寄稿していただいたいの関係があった。  
**藤本** なるほど。  
**細矢** 先生は版画を12枚並べて「うーん……」ってしばらく黙って見ててね。そして一言、「湧いてくる」って言ったんですよ。  
**藤本** お〜！  
**細矢** それで、毎月締切を決めて、版画に合った今川先生の詩を載せた。今

川先生も感性をそのままぶつけてくれた。そのコラボがよくて、読者にも好評でした。しかも修三先生、全部無償なんですよ。「謝礼を渡したい」って言うっても、「一切いらない」って。  
**藤本** へ〜！

**細矢** で、1年やった後、せっかくなのでその版画で広報のカレンダーを作ったんですよ。象潟の1年の行事を載せて、版画と同じサイズの12枚綴り。それを全世界帯に配布したこともありましたね。

**藤本** うわー、いいなあ！  
**細矢** よくね、お店なんかに行ってもその版画だけを切り抜いて額に入れたりしてることがあったんですよ。修三先生は、カレンダーを出したときも



全然代償を求めないんです。一切無料。で、終わったときに今川先生から「2年分を詩集として出版したい」って相談を受けて。それは修三先生も「どうぞどうぞ」っていうことだったので、私



が間に入って印刷会社とやりとりをしました。でも、出版社の方から、人物が右向きな版画を、「どうしても中央に向かせたいので裏焼きして反転できれば」という話があったときには、さすがに断ったんですよ。でも、今川先生が修三先生に直接電話したら、修三先生は「いいですよ。いくら加工してもらっても」って（笑）。  
**一同** (笑)

**細矢** だから、詩集だけは裏焼きが入ってるんですよ。  
**藤本** へ〜。なんとも、のんびりだ（笑）。  
**細矢** 詩集見ましたか？  
**藤本** はい。齋藤さんに見せてもらっただんですけど。でもそれが、どの作品かはわからないです。  
**細矢** それは誰もわからないです。今

川先生しか。  
**藤本** うわあ、それは気になるなあ。今川先生にもお会いできたら聞かなきゃです。ちなみに最初に細矢さんがお会いされたときは、修三さんはすでに東京にいらっしやっただけですよ。  
**細矢** そうですね。個

展とか特別なことがない限りはこつちに来ることはなかったですね。ちなみに、町村合併30周年記念事業の文化祭に合わせて、公民館での個展の開催をお願いしたときは、快く引き受けてくれたばかりか、自分も行って版画講習会もやりますよって、来てくれました。それも自費で。

**藤本** 交通費すら自費だったんですね。  
**細矢** ええ、そうなんです。その頃はよくわからなかつたんですけど、秋田に来たら思い出の場所とか、風景をスケッチして帰られたみたいですね。その風景を晩年は作品に取り込んでいたみたいで。修三先生はお酒も飲まないし、記念式典の案内状を渡しても「私はこういうの出ませんから」って。そういう人なんです。一切お金を

求めない、招待も受けない。それでいて、人には一生懸命尽くしてくれる。  
**藤本** ああ、すごい……。  
**細矢** まだまだあるんですけど、とりあえず手元にあった手紙を持ってきました。  
**藤本** あら〜！  
**細矢** 手紙と一緒に新聞の切り抜きを同封して、いろいろ象潟の提案をしてくれるんですよ。

**藤本** うわあ〜！  
**細矢** 象潟の町づくりはこうしたほうがいい、とかですね。あと、このときは、先生からお願いがあって手紙が来て、秋田県の広報課の方にいろいろ写真など送って欲しいっていう依頼で、そのお礼っていうのでこういう風に小作品を送ってくれて。

**藤本** 宝物だ。





**細矢** 雑誌や本の挿絵にした小作品もみんな「あげます」って送ってくれるんですよ。テレホンカード作ったときも送ってくれましたしね。あと、年賀状は毎年カラーの版画のもので。

**藤本** 資料館にも年賀状がありました。「初春」って書いた2色くらいいの版画。すごいよかったです。

**細矢** 私ね、「道の駅象潟ねむの丘」の3周年記念として、先生の個展と予

って。

**細矢** そうですよ。

**藤本** 展覧会と作品集と、そしてこの町に来ると池田さんの作品を見れる常設の場所があるっていうことを、僕は目指したいなって思ってます。ただ、それはすぐにできる事ではないので。時間をかけながら、力をお借りしつつできないかなと。

**細矢** 私の友だちにも大学時代に修三先生のところ遊びにいってたやつもいてね。そいつとも「やっぱり保存していかなきゃだめだよ」って話をしているんですよ。

**藤本** 今取材している『のんびり』3号目が出る段階で、僕たちとしては展覧会の告知ができたらって思ってます。

**細矢** うん。

**藤本** たまたま生家の方に伺ったときに、すぐ向かいにある市の施設が耐震工事されていて……。

**細矢** 公会堂ですね。

**藤本** ああ、そうですね。いやあ、ほんとに細矢さんに会えて良かったで

す。

す。修三さんの人となりをとてりア

ルに感じることができました。こんなふうに絵を描く人って、自分の描いた絵を広く届けたい一方で、食べていくためには自分の絵が高くて売れることも重要で。だからその狭間で苦悩があると思うんですけど、僕は、日本人の家で唯一その答えを出せた人が池田修三さんなんじゃないかなと思うんです。値段をちゃんと自分で抑えて、ずっとこの象潟の町にこだわって。レセプションには出ない、とかいろんなことに関してシンプルにスマートに、自分できちんと決めてたんだなって。

**細矢** 飾らない人だし、質素だしねえ。

**藤本** あらためてお話を伺って、展覧会はこの町での開催にこだわりたいなって思いました。池田さんのことを広く知ってもらいたくなって思ったので、それこそ東京とかで、とも思っていたんですけど、やっぱりまずはこの町だなと。

**細矢** 寄贈を受けた作品があるから、きつてきますね。

**藤本** 細矢さんと修三さんが作ってくださった大切なもの、きちんと継いでいきたいです。

約販売会を企画したんですよ。そのときはもう、ものすごい売れ行きで、一つの作品に何枚も申込みがあって、先生が後から後から刷って送ってくれて、そのときに風景画をかなり展示されたんです。それが地元象潟の今はない景色、昔の漁港の風景だとか、そういうところを思い出して描かれてたり。マニアがたくさんいて、一人で10枚も20枚も注文して。「みんな欲しい」とか言ってるね(笑)。

**藤本** なるほど。今、町でいろいろ聞いてても、「象潟の風景のやつが欲しかったけど」とか、欲しくても手に入られなかった人がいたんだなって。その展覧会をされたときの作品は細矢さんのお家に飾られてるんですか？

**細矢** 私は販売する方ですから、1点しかゲットできなかったんです(笑)。その企画のときに先生のお宅にアポなしでお邪魔したことがあったんですけど、ちいさなお家で、作業するところも四畳半ぐらいしかない。そこにもう材料がびっしり。昔からの版木が積んであるんですよ。で、それを見てもうらったりしていたときに、「版木の置く場所がなくて」とって。「どうしてるんですか？」って聞いたら「ゴミに出



してる」って言うんですよ。それが、今となっては一番残念なことです。

**藤本** うわっ……！

**細矢** 「もったいない！」って。資料館の方で収蔵庫があるから、「先生、私引き受けましょうか？」って話したんですよ。でも、結局実現しなくて。先生もたぶんそれを一番後悔してたんじゃないかな。

**藤本** そうですよ。さっき資料館で池田さんの親族から送られてきたっていう、作品リストを見せてもらったんです。池田さんがもう全作品について記されていて。あれが、すごいなって思ってます！

**細矢** 大学ノートがもう、分厚くなってるね。

**藤本** あれがもう傷みがすごくて、今ちゃんと複写して撮っとかないかって思ってます。そして、町と共有しつつ、ちゃんとした図録っていうか作品集を作ったほうがいいんじゃないかな





「アンサンブル」1987年

## 第5章 池田修三 とともに

ころで取材を続けるヤブちゃんチームを象徴に残し、気になっていた場所へと向かってみることにします。その場所とは、池田修三さんがかつて教師をされていた、秋田県立由利高等学校でした。

由利高校の校舎は、新しく建て替えられたばかりなのか、とても綺麗で、そのことが僕たちを少し不安にさせました。しかし、修三さんの作品がないわけではない！と信じて中へ。いきなり訪れた僕たちですが、修三さんの取材をしている旨をお話すると、現在こちらで美術を教える高久恵美先生を紹介してくださいました。



### 意思を受け継ぐ

細矢さんのお話を聞いたことで、最初に作品を購入したあの日からずっと感じていた池田修三さんの優しくもはっきりとした意思が、僕の単なる想像ではなかったことがわかりました。自らのスケールをハッキリと認識し、その身の丈の内にあることを大切に守り、これほどまでに丁寧なものづくりをされた作家が、ほかにいるだろうか？そう思うほどに、僕は細矢さんの口から語られる修三さんの姿に、たくさんの学びと感動をいただきました。

さあ、いよいよ僕たちの出番です。のんびりチームの意思もこれで確かなものとなりました。残された時間はあとわずか。ここからは2チームどころ

か、3チームに別れることに。藤本&笹尾さん&広川くんは、展覧会開催に向けて公会堂を借りる交渉をすべく、にかほ市役所の財政課へ。ヤブちゃん&はっち&竜ちゃんは、裏焼きされ反転した作品はどれか？も気になる、詩人の今川洋先生のところへ。そして浅田くん&田宮さんは、再び郷土資料館に行き、本誌に使うための作品を複数撮影します。

### 由利高校へ

いよいよページ数も少なくなってきました（笑）。ここからは少し駆け足でいきますよ。財政課で担当者さんの説明を聞き、公会堂を借りる手はずを整えた僕たち（藤本&笹尾&広川）は、そのまま広報課に向かい、現在の広報誌の担当者さんに、今一度表紙を池田修三さんの作品にしてはどうか？と大胆にも提案してみます。わずかながらもその手応えを感じつつ、郷土資料館へ。複写を終えた浅田くん&田宮さんと合流します。詩人の今川先生のと



高久 私、ここに勤務して5年目で、もう新校舎ができた後だったんですけど、その前の講師時代に、古い校舎にも入ったことがあるんです。そのときはもうごく当たり前みたいな感じで、廊下とかにパーンとありましたね。あと会議室とか図書室とかそういうところにも。

藤本 すごい。池田修三記念館みたいな学校だったんですね(笑)。

高久 そうですね。でも地元の人はその価値をもって観てなかったかもしれないですね。

藤本 それが逆によかったというか。

高久 そうですね。自然に観てたっていう。

藤本 なんかやっぱりそういうあり様みたいなのを見たくて。なので、由利高校でもそうあるといいなと思って来たんですけど。

高久 そうなんです。今はこの部屋に飾られてるだけで。

藤本 でもこれはこれで、少なくとも箱に入ってたよかったです(笑)。

高久 箱に入ってるのもたくさんあると思います(笑)。ここは基本的にお客さんが来て話をしたりとか、困った生徒が来て面談したりとかっていうところなので、雰囲気としてはなごみま



すね。

藤本 そうですね。癒されます。

高久 新校舎はガラスがちよつと多くて、壁が少ないんですよ。展示にすごい困る。でもこれを機にちよつと飾ってみたいですね。

藤本 ぜひ！

### タイミング

由利高校を出た僕たちは、秋田市内へと戻る車内で、あらためて今回の取材の意味について話し合っていました。かつて修三さんが教鞭をとった由利高校ですら、絵が飾られなくなっているという現実を前に、僕たちは何かギリ

ギリのタイミングのようなものを感じていました。つまり、今回の取材旅がなければ、もう池田修三さんに光が当たることはなかったかもしれない……。今回の取材で、様々なお家にお邪魔し、そこに息づく修三作品に触れてきましたが、その一方で、修三作品がいよいよ奥にしまわれつつあるということも、僕たちはうっすら感じていたのです。それが由利高校の状況を見たことでハッキリしたのだと思います。

僕たちは、これから果たすべき使命について、ずっとずっと語り合いつづけます。

### 温故堂

とはいえ、ひとまず今回の特集としては、終わりを迎えないければいけません。象潟での取材が長引き、未だ合流できていないヤブちゃんチームを置いて、最後に僕たちが向かったのは、僕が以前、娘のために修三作品を買って求めた、古美術屋さん「温故堂」でした。



「さくらんぼの実る頃」1996年

車内で色々話をするなかで、どうせなら『のんびり』読者にプレゼントする池田修三作品を買いに行こう、と盛り上がったのです。僕が知る限り、一番多くの修三作品をお持ちの温故堂さん。数十枚はある作品のなから、読

者へのプレゼントを決めるのはかなり大変な作業でした。しかしなんとか2点にまで絞ります。一つは、いかにも池田修三さんらしい少女の姿が愛らしい「さくらんぼの実る頃」という作品。

そしてもう一つは、広報きさかたの表紙になっていた作品で、タイトルはズバリ「十月」。

今日は10月4日。まさに今日という日にふさわしいような気がしたので。しかし、悩みに悩んだ末、読者プレゼントとしてはやっぱり「さくらんぼ」がいいのでは？ ということに。けどもう一つの候補だった「十月」がどうしても気になる僕は、読者プレゼントにしないなら、自分で買ってしまおうかと考え始めました。しかしそのとき、僕は閃いたんです。そもそもどうしてこの絵がそんなに気になって仕方ないのか？ それには確かな理由がありました。その理由とは、目の前にいる、のんびりチーム笹尾さんにあります。





「十月」1982年

ミラクル

青空の下、赤とんぼと戯れる、女の子にも男の子にも見て取れるこの子の姿……まさに、小坊主。僕たちにはもう、この絵の子が、笹尾さん（小坊主）にしか見えなくなってしまうかもしれません（笑）。そして、その場にいた、藤本、浅田、広川、田宮の男性陣4人が突如意気投合。この作品を笹尾さんにプレゼントしよう！ ということに。



笹尾さんも大喜びだし、僕たちも気になる修三作品がきちんと落ちつくところに着いてくれた気がして、どこかほっとしたような気持ちになりました。そうこうするうちに、ようやく秋田市内に戻って来たヤブちゃんチームと合流。温故堂さんで読者プレゼントを買ってきたことや、笹尾さんに絵をプレゼントしたことを話します。そして笹尾さんが、僕たちがプレゼントした例の小坊主の版画「十月」をヤブちゃんたちに見せたときでした。ヤブちゃん、はっち、竜ちゃんの3人が、「ええく〜っ！」「ほんとにー？」「ウソッ！」「大騒ぎ。いやいや確かに羨ましいだろうけど、そこは、ほら、そういう流れだったから……と、説明しようと思いきや、どうやらそういう悲鳴ではない様子。そして僕はその悲鳴の理由について聞いてみたんですが、これにはさすがに僕もぞっとしました（笑）。これまた、ほんとにミラクル。何をそんなに驚いたのか？ ぜび、ヤブちゃんチームの動向をまとめた、ヤブちゃんノートで確認してみてください。

ヤブちゃんノート

10月4日（取材2日目）

AM10:00  
横山八重子さんに会いに、「ヤエ美容室」へ。

浅田さん、はっち、竜ちゃん、私の4人が向かったのは、横山八重子さん宅。修三作品を探すなかで「それならあの方がいい」と口々にあがってきた「横山さん」。これは素敵な作品に出会えそう！ と、アポを取り、半ば強引にお邪魔させていたいただくことに。場所は池田医院の数件隣の美容室。

「こんにちはー」。ご自宅の扉を開けるやいなや、風景作品を発見！ 「どうぞ、奥にもありますよ」と案内してもらうと、額に入った作品やハガキなどがずらり勢揃い。「おー!!」と盛り上がる一同。

『のんびり』秋田編集チーフ・矢吹史子の、池田修三・取材旅ノートから2日目の動きを少し紹介！ いろんな方のお話から、修三さんのお人柄に、ふんわり、迫ります。



これ以外に30枚くらいの作品をお持ちという横山さん。修三さんとは、ご近所というだけでなく、修三さんが教員時代、横山さんのお姉さんの担任だったり、ご主人が展覧会の企画をされたりしていたそう。



「この『えこのま』というのは、海から見た鳥海山。描かれているほとんどが、地元風景ですね」ふるさとが描かれていることが、横山流・池田作品選びの大切なポイント。「穏やかな方でしたよ。誰にでも同じ目線で。だからみんな吸い込まれていくんですよ」



「八重子さん、これは地元の人に買わせてあげて」とお願いされたそう。

「池田先生の版画は日本中で一番安いんですって。」

『高いと皆さんのお手に入らない。私は全部の人に喜んでもらいたい』  
って、絶対に値段を上げないんです。そういう先生でした！





PM2:00  
今川さんに会いに、  
保育園へ。

昭和60年4月からの2年間、池田さんの作品が「広報きさかた」の表紙になった際、毎回それに詩を寄せていたという、今川洋さんのところへ。現在、小砂川保育園で理事長を務めている今川さん。90歳とは思えない、おしゃやかなご婦人。お名前からか、勝手に修三さんと同じ男性だと思いついていた私たちは、まずそこで、びつくり!

「詩のイメージが作品の風景に合うように……。考えていて、はっと気づいたら朝になっていたこともある。でも、楽しかったなあ」

この2年間の版画と詩を、一冊にまとめたのが『無心に』という本。300冊を自費制作されました。  
「池田さんの教え子さんたちから譲ってほしいと言われて大変だった(笑)」

今では今川さんの手元にも2冊を残すのみ。



細矢さんから聞いて気になっていた、裏焼きして絵が逆向きになった作品。いったいどれなんだろう?

「どれだったかなあ……。忘れてしまったなあ……」

えー! 知りたいよー! 私は「どれでしょうねえ?」と平然と見守るフリをしていましたが「思い出して〜! 今川さん!!」と心の中で念力を送りまくりました。すると……。

「あ、これだ!

『このトンボの作品の向きを変えても良いですか?』  
って先生に電話した……」



これかー!  
はあー。スッキリ!  
それにしても、  
絵の向きを変えてもいいなんて!  
どこまで寛容なんだろう、  
修三さん……。



PM4:00  
再び池田医院へ。  
そこで出会った  
柴田堯さん……。

池田医院の奥さんから、修三さんのインタビュアーが載った雑誌が見つかったとの連絡があり、再び生家へ。

そこで「うちの親戚で、ちょうど今来ていたんです」と紹介されたのが、なんと柴田さんのご主人! 藤本チームが午前中に伺ったときは堯さんはいらっしやらなかったけれど、ここで会えるなんて!

今、役所に飾ってある作品は、新庁舎を作る際「庁舎内に象潟出身の芸術家の作品を」と、柴田さんが提案して、わざわざ東京のお宅まで行って預かってきたものだといいます。

「俺のような若造にも話し相手になってくれた」

と、熱く語ってくれる柴田さん。



「俺がこの人をすごいと思うのは、弟子を置かないんだ。思った色が出ねえばいげねってことでよ。だから全部自分で刷ってるんだって。俺は、この人はもつと有名になってもいい人だと思っ。でもやっぱり商売っ気なくてな。今風の絵描きみたいやれば、もつともつと広まったんだらうけど。」

「象潟に対しての思いはすごくあったみたいで、まだ元気なころはこっちに住みたいっておっしゃって。でも、おばさんがこっちに住んだことがないので反対されるかな、とかって言いながらね」と奥さん。

たしかに晩年は、鳥海山や九十九島など、象潟の風景をたくさん描いている修三さん。遠く離れた土地から、故郷に思いを馳せていたのかと想像すると、なんだかキュンとしてします。

さらに柴田さんは、綺麗な夕陽が見られると、九十九島が見わたせる小高い丘へと私たちを案内してくれました。

うつくしい……。

あらためて

「修三さんの作品の魅力は?」と聞く私に、柴田さんは、



「やっぱり、やさしさだべな!」

にこりと笑って答えてくださいました。



『版画なんて、  
いいところ5年。  
色があせるから。  
だから安いんだよ』

って自分で言うんだ。そんなこと言う人いいねーべ(笑)



# 物語は つづく。



あらためて言いたいと思います。池田修三さんは素晴らしい作家さんでした。秋田が誇る、いや、日本が誇る作家さんだと心から思います。修三さんの穏やかな人柄を象徴するような、作品の反転エピソード。まさか印刷で裏焼きされたその作品が、僕たちが最後の最後に出会い、笹尾さんにプレゼントすることになったあの小坊主だったとは（笑）。本当に驚きました。そもそも数十点もある作品のなかから、あの子が浮上してきたのは、きっと修三さんが僕たちにくれたちよっとしたプレゼントだったんだと思います。修三さん、どこまで優しい人なんだろう（笑）。

僕は今、編集者という自分の仕事に感謝しています。こうやって池田修三さんに、今一度光をあてる場所（媒体）があるという幸福。しかしながら、それは池田修三さんの作品の価格を上げてしまうことにも繋がってしまいます。けれどそれは絶対に避けたいのです。だからみなさん、ここで僕は修三さんの思いを守るための『のんびり』なりのルールを、ふんわり考えてみました。もちろんあくまでも提案です。でも、それを活字にしておくことがとても大切だと思うので、以下に記してみます。

藤本智士（のんびり編集長）

- ① 池田修三さんの作品は、自分で買うのではなく、贈られることに意味があります。
- ② すなわち、修三作品の価値は、作品そのものだけではなく、そこに生まれるエピソードとにもあります。
- ③ 修三さんは作品の金額が無闇に上がってしまわないように気を遣ってこられました。だからこそ、例えば5万円以上もしてしまうような修三作品がもし現れても、それはもはや修三さんの意思ではないので、買わない方がいいと思います。

さて、取材中にも言っていたとおり、僕たちは池田修三さんの展覧会を開催したいと思っています。しかしそれは、あたらしい「ふつう」の展覧会です。単に池田修三さんの作品が飾られるということではなく、それをお持ちの方のエピソードとともにある展覧会。そこをお願いがあります。この特集を読んでくださった方のおかげで、修三さんの作品をお持ちだという方、ぜひ、その作品とともにあるエピソードを書いてお手紙をお寄せください（詳細は巻末にて）。あなたがたくなる頃には、まず象潟の町で、もちろんあの公会堂で、池田修三さんの展覧会を開催したいと思っています。そうやって、象潟の町にたくさんの方の思いを集めることができれば、修三さんはきっとまた優しく微笑んでくれると思うのです。

池田修三作品に  
まつわる

あなたの  
思い出、  
きかせて  
ください。



特集内でもお知らせしたとおり、のんびり編集部は2013年春に、池田修三さんの展覧会を開催したいと考えています。そこで大切にしたいのが、暮らしのなかにある池田修三作品の姿。ただ作品を飾るだけではなく、それらの作品をお持ちの方のエピソードも合わせて展示できればいいなと考えています。

そこで、もし読者の方で池田修三さんの作品をお持ちの方がいらっしゃいましたら、その作品の写真と作品にまつわるエピソードをお手紙でお送りいただけないでしょうか。池田修三さんらしい展覧会をつくるために、ご協力いただけますようよろしくお願い致します。

#### 【お手紙宛先】

〒011-0945 秋田市土崎港西3-9-15-303  
NPO法人 あきた地域資源ネットワーク内  
あきたびじょん企画室 のんびり編集部

#### 【メール宛先】 info@non-biri.net

エピソードをお寄せいただいた方には、編集部よりご連絡を差し上げ、展示方法などをご相談させていただきます。

- 展覧会会期：2013年4月（予定）
- 会場：象潟公会堂（秋田県にかほ市）（予定）
- お問い合わせ：あきたびじょん企画室  
のんびり編集部 TEL 018-816-0610

# 秋田には

# 大森山動物園があります。

取材＝藤本智士・矢吹史子／文章・構成＝高木さおり／写真＝鈴木竜典  
Text: Satoshi Fujimoto, Fumiko Yahara, Siori Takagi / Photo: Ryusuke Suzuki



きっと誰にでも思い出の動物園というものがあると思います。幼い頃に両親と、学校の遠足で級友たちと訪れた、あの動物園。

今回ご紹介する秋田市の大森山動物園は、市内で生まれ育った人たちにとっての、そんな思い出の場所。

しかし、おそらくこれを読むみなさんと同じように、大人になってからは気付けば足が遠のいてしまった、曰く「どこにでもある、ふつうの動物園」。

けれどもその大森山動物園が、秋田に住む人だってなかなか知らない、ちょっと特別な場所だったのです。

偶然訪れた私たちが遭遇して、思いつき感動してしまった、その名も「まんまタイム」。秘密はそこにありました。

まずは、みなさんにもまんまタイムを体験してもらいながら、その向こう側に見える、働く人たちのお話を読んでもらえたらと思います。これは、ちょっとすごいぞ。そう感じてもらえるはずです。

## アライグマの

## 「まんまタイム」

大森山動物園で働いて今年で8年になる飼育員、牛越利之さんによる、アライグマの「まんまタイム」。偶然居合わせた地元の保育園の子どもたちと一緒に、どうぞみなさんも楽しんでみてください。

**牛越** みなさん、こんにちは！

**子どもたち** こんにちは！

**牛越** ようこそ大森山動物園にお越しくださいました。誠にありがとうございます。それでは、アライグマさんたち、お腹が空いているようなので早速エサ、まずはパンをあげていきたいと思えます。

**子ども** パンも食べるんだあ。

**子ども** かわいー！

**牛越** 大森山動物園のアライグマは全部で2頭います。双子の兄弟の男の子、5月29日生まれて、2歳になりました。2歳ってとっても人間とは違うんだね。これからだんだん大人になっていきます。アライグマって、今みたいの水にごはんをつけて洗ってするようにして食べるイメージが強いと思いますが、ちょっとね、次はエサをバナナに変えてあげてみたいと思います。ごはんの食べ方が変わります。よく見てみてください。



**子ども** 一気に食べた。

**牛越** さっきと何が変わったか分かるかな？

**子ども** 水で洗うの、しなくなった！

**牛越** そうだね。パンとバナナと何が違うかな？

**子ども** ちっちゃいから！

**牛越** ちっちゃいからじゃありません。ああ、じゃあ、ちょっとブドウをあげてみよう。よく見てね。はい。もうなくなりました。皮ごと食べてるけど、水に入れてるかな？

**子ども** 入れてない。

**牛越** ほら、おじさんの手をよく見てね。パンは握ってもな〜んにも出てきません。ちっちゃくなっちゃいました。でも、ブドウ、握ると何か出てき

ます。これは、何かな？

**子ども** ツユ！

**牛越** ツユだね。この水分があるのではないの。その違いで水に入れるかを決めます。ですから、アライグマはエサを洗って食べるというのは実は間違いです。必ず、動物の行動には理由が伴います。パンは水分が少ないので水でやわらかくして食べるんですね。それだけではなくて、水生生物を獲る動作の名残でもあります。あとね、野生のアライグマたちは全く別のものを食べています。白い板の前にお友だち、そこに描いてある3つの絵を大きな声で教えてください。







大森山動物園園長  
小松守さん

### 「秋田の人のための 幸せ時間の空間を作りたい」

大森山動物園って、県内の人は「あんまり観るものないよね」と思っただけかもしれない。動物はそれなりにいるけど、決してコアアがパンダがいるわけでもない。でも東北でもたくさん来園者がある動物園なんです。それはどうい違いがあるかって一言でいうと、アライグマを担当してる牛越なんです。いや牛越って、本人、一人だけじゃないですよ。うちの動物園にいる人は、それぞれに個性をもっています。牛越には彼の個性があって、別の人には別の個性がある。動物園は動物が主人公だとみなさん思っただけじゃない。そこにかかわる飼育員さんも見るといことが、実は重要だと思っんですよ。

牛越が今の「まんまタイム」をやりはじめたときは、「おおいにやりなさい」と言いました。もしかして見る人によっては、生きたものを食べさせることへの抵抗感があるかもしれない。

でも、それは生物界の野生の繋がり、食物連鎖の仕組みを伝えることにも繋がるわけです。結局、我々人間だって、いろんな生物の命をありがたいたいと思っで、食べて生きている。それを含めて、味わって伝わっていくんじゃないかと思っんですよ。小難しい言葉じゃなく、一生懸命、真摯に熱い思いをもっで伝えている。彼自身も思い悩みながらも繰り返して繰り返して伝え続けている。それが言葉の端々なり、態度に出てきているんですよ。

飼育員には「一番大切なのは、あなた自身の思いなんですよ」って必ず話すんです。動物園は、動物を通して自



分の思い、意識を伝える場。だから「自分の思いを整理しておきなさい」って。あと、もう一つ、「動物とお話しなさい」って。話して感じた動物の思い、それを観せればいいんじゃないかって。飼育員と動物がいい関係になれば、必ず動物も幸せになるんですよ。健康になっで幸せになったときに、見ている人も「ああ、いいね」ってなる。だから、大森山動物園では調教をいっぱいやっていきます。



普通、動物園って調教を嫌っんです。動物を擬人化するっていうかね。それは、なんのことはない、欧米の「動物園はこうあるべき」という意識にとらわれてるだけなんです。そうじゃなくで日本人の動物園を作ろうぜって私は思っ。直輸入してもう130年、まだモノマネするのとか。私は、日本に、秋田にいる人たちのための幸せ時間を感ずる空間を作っであげたいんですよ。



水族館を経験してるアシカの飼育員の彼女がこう言ったんです。狭い場所だけ「トレーニングをやりたい」って。だから「やってみる。ただ我流はだめだから勉強してこい」と。そしたら自分でいろいろなこと始めて、アシカと彼女がとて仲良くなっだ。その姿を、



みんなうっとり見てるんです。それは、とても幸せな光景なんですよ。動物園の動物を馴らしてはいけないうって考えをもつ人もいます。でも私は、そこは切り分けて考えないといけないと思っています。動物園の動物はもう野生動物ではない。人と動物がいい関係になっで、動物が安心したら繁殖をするんですよ。だからうちの動物園はちっこいやつがいっぱい生まれてますよ。

でもね、飼育員にあれもこれも全部やれって言っだって無理な話です。それも私、それぞれ個性がいいと思っでるんですよ。なんだっで絶対やらなきゃいけないわけじゃなくて、例えば、少なくともエサをあげる時間は1日1回はあるから、下手くそでいいし、別にみんなを集める必要もないけど「ごはんの時間だよ」って声に出して言っでからあげる、だとか自分でそうやって工夫してみてよってね。一律に、デコボコなしにするんじゃないよって、牛越みたくにアライグマで天下第一品の男がいるかもしれないし、キリンで淡々とやる人もいるかもしれない。いろんな人がいていいんです。それが多様な生き物のいる動物園ですよ。



ちをキャラクター化しようとは全く思いません。ありのままの姿を見てほしいんです。だから、アライグマにはあえて名前を付けていません。「2666」とか、番号だけ。お客様からしたら、親しみやすい名前を付けるのが一番なんですけども、名前ってイメージを縛る力があると思うんですよね。ただ、大森山動物園がもしろいのは、そんなアライグマがいる一方で、カピバラの「ぐりちゃん・ぐらちゃん」もいるところ。いろいろあっていい。そんな状況をよしとする園長の存在がある

るっていうことなんですよね。たぶん園長がいなかったら、今の「まんまタイム」はできていません。実は、人としゃべるのが得意じゃなくて、最初の方はほんとに膝が震えるくらい怖かったですよね。でも、ある日、園長から関東・東北地区の動物園の飼育員が来てるなかでまんまタイムをやってくれて。そのときにポロっと言われたのが「誰か一人に伝える気持ちがあれば、何千人いたって同じだ」と。それを聞いた瞬間ほんとに楽になりました。すごい人です。まんまタイムって、もともとは猛獣から始まったんです。そのとき担当していた職員がものすごく解説が上手で、いつも最後に拍手が起こっていた。私は解説で拍手をもらえるだなんて考えたこともなかったんで、感動してしまつて。それで、その人を目標にして、アライグマのまんまタイムを始めました。最初は知識も全くなかったのとおりあえず動物の生態や生息地とかベーシックなものだけ解説して。でもよく考えたら、それってアライグマ好きな人だったら簡単に調べられることなんです。じゃあ、もっと違う観せ方をしなければって、一個ずつ試行錯誤



誤しながら今のカタチを見つけてきました。初めて拍手をもらえたときの高揚感には忘れられません。それは、始めてだいたったからで、ザリガニのまんまタイムをやるようになった6年前くらいのことでした。お客様に感動してもらっているんだっていう手応え。それがあつたからこそ、今日まで続けてこられたんだと思います。飼育員って動物とお客様を繋げる橋だと思っんです。動物は言葉を話せないで「こう思ってるときはこういう行動するんですよ」とか、それを伝えてあげるのが飼育員だと私は思います。自分の担当している動物で何ができるのかを、今もずっと考えていますね。

### 秋田市 大森山動物園 ミルヴェ

◎開園期間 平成24年は12月2日(日)まで[平成25年3月16日(土)開園]

◎開園時間 9時~16時30分[入園は16時まで]

〒010-1654 秋田市浜田字湯端154 TEL 018-828-5508 <http://www.city.akita.akita.jp/city/in/zo/>

### 「雪の動物園」

◎開園期間 平成25年1月5日(土)~2月24日(日)までの土日祝日 ◎開園時間 10時~15時(入園は14時30分まで)

冬季は閉園している大森山動物園ですが、この期間は特別に開園! 雪とたわむれたり、走り回る姿など、普段見ることのできない、この時期ならではの魅力が満載。その様子をじっくり観察しながら、真っ白の幻想的な雰囲気の中で動物園をお楽しみください。



### 大森山動物園 飼育員 牛越利之さん

### 「動物といっしょに、伝え続けていく」

ずっと動物園で働きたかったんです。動物が好きだった。でも、なかなか就職できない仕事だと思って、半ばあきらめてました。で、高校を卒業してからは飲食店でウェイターの仕事を。それが、ちようど店を辞める頃に、大森山動物園で職員の募集があることを知りました。ただ、その仕事は、飼育じゃなくて園内の管理。でも、それでもいい!と。もうとにかく、動物園で働ける! って。

中途採用だったので働き始めたのは10月。最初は園内の整備、草刈りなどの仕事をしていたんですが、幸運なことに、翌年の4月には飼育の仕事に移ることになりました。園長との面談で「飼育をやりたい気持ちはあるか?」って聞かれて、「やりたいです」って伝えたら、即決。もう、かなり嬉しかったです。もちろん、想像とのギャップはありましたね。当たり前ですが、動物は死

んでいく。園では、亡くなると必ず病理解剖をするんです。私は1年間ほど獣医さんに付いて、治療の補助や解剖の手伝いとか普通の飼育員じゃ体験できないことをやらせてもらったんですが、一番最初がチンパンジの解剖で、それが、ほとんど人間と変わらなくて、ものすごい衝撃を受けました。神経症状が出ていたら頭蓋骨を割って脳を取り出すこともあって、普通の人だったら卒倒していたかもしれないですけど、私は大丈夫でした。いや、大丈夫になった、というのが正しいかな。そのときは、がむしゃらだったんです。

動物園って、いろんなカタチがありますよね。もちろん、それはお客様が選ぶところなんだと思うんですけど、私は、今のやり方で伝え続けていきたい。うちのアライグマやマーコールた





## 航空

- 東京(羽田)⇄秋田 ANA/JAL 65分(ANA)、70分(JAL)
  - 大阪(伊丹)⇄秋田 ANA/JAL 80分(JAL)、95分(ANA)
  - 札幌(新千歳)⇄秋田 JAL 55分
  - 名古屋(中部国際空港)⇄秋田 ANA 90分
- 【リムジンバス】秋田空港～秋田駅西口(約35分)

東京(羽田)⇄大館能代 ANA 70分(ANA)

【リムジンバス】大館能代空港～大館市内(約55分)  
大館能代空港～北秋田市(鷹巣)(約15分)

<ANA>0570-029-222 <JAL>0570-025-071



## 新日本海フェリー

- 北行** 敦賀(10:00)⇄新潟(22:30)⇄秋田(翌5:50)⇄  
苦小牧東(17:20)
- 南行** 苦小牧東(19:30)⇄秋田(翌7:45)⇄  
新潟(15:30)⇄敦賀(翌5:30)

●秋田港から秋田市街へは車で約30分。  
(秋田中央交通バスのご利用も可能)

<秋田フェリーターミナル>018-880-2600  
運行スケジュールは必ずお問合せください。

### 藤本流 のんびり飛行機旅

車で丸一日かけて秋田へ行くことも多い僕にとつて、伊丹空港から秋田空港までたったの80分。って、まるでワープ。しかも早割の安い航空券使ったら、大阪-東京の新幹線代と変わらない安さ! 関西から意外に行きやすいのです。



## 高速バス

- 新宿⇄秋田 8時間30分(フローラ号)
- 仙台⇄秋田 3時間35分(仙秋号)
- 横浜⇄秋田 9時間40分(ドリーム秋田・横浜号)

<秋田中央交通(フローラ号・仙秋号)>018-823-4890  
<JRバス東北>018-862-9461

●秋田市以外の市町村を往復する便も複数あります。



## 自動車

- 仙台⇄秋田 約3時間30分
- 東京⇄秋田 約7時間30分

<日本道路交通情報センター(秋田センター)>  
050-3369-6605

## 他県から秋田へのアクセス

### 秋田新幹線こまち



- 東京⇄秋田 4時間
- 仙台⇄秋田 2時間30分

<JR東日本テレフォンセンター>  
050-2016-1600

### 寝台特急あけぼの



- 上野⇄秋田 9時間35分

<JR東日本テレフォンセンター>  
050-2016-1600

### 福田流 のんびり新幹線の旅

新幹線「こまち」だと東京から約4時間ほどで秋田まで。お弁当食べて少し寝て、盛岡で青森行きとの切り離し作業で目が覚めて、本でも読んでまたウトウトしていると今度は大曲でのスイッチバックで目が覚めて、そこからは約30分ほどで秋田到着。簡単には寝させない新幹線、それが「こまち」。来年3月からは新型車両のスーパーこまちも走り、ますます便利になる予定。頭に向かって手で三角を作り、コマチ! というのを流行らせたい。



## 秋田内陸縦貫鉄道

仙北市(角館)～北秋田市(鷹巣)

P48～秋田内陸縦貫鉄道

角館駅  
| (普通列車で約2時間22分～2時間44分)

鷹巣駅  
上り(角館～鷹巣6本)  
下り(鷹巣～角館5本)

秋田内陸縦貫鉄道株式会社  
北秋田市阿仁銀山字下新町41-1  
TEL 0186-82-3231

## 秋田市

P54～大森山動物園

【中央交通バス】	【JR】	【自動車】
秋田駅西口   (34分)	秋田駅   (羽越本線7分)   (25分)	秋田駅   (25分)
大森山動物園   (バス10分)	新屋駅   (バス10分)	大森山動物園   (バス10分)

大森山動物園ミルヴェ 秋田市浜田字湯端154  
TEL 018-828-5508

## にかほ市象潟

P4～にかほ市象潟郷土資料館

【自動車】	【JR】
秋田中央IC   (60分)	秋田駅   (羽越本線1時間15分)
金浦IC   (35分)	象潟駅   (徒歩10分)
にかほ市 象潟郷土資料館	にかほ市 象潟郷土資料館

にかほ市象潟郷土資料館  
にかほ市象潟町字狐森31-1 TEL 0184-43-2005





## Discover AKITA

Photo Tomoki Hirokawa

川原毛大湯滝  
湯沢市高松 高松沢国有林内

## 『のんびり』をお読みいただきありがとうございました。 アンケートにご協力ください。

『のんびり』は人を基軸に「あきたのほんとう」をまっすぐ伝えるマガジンです。本号へのご感想、今後取り上げてほしいテーマなどのご要望、ご提案を、ハガキか「のんびり公式ウェブサイト」のアンケートページからお寄せください。

抽選で『のんびり』オリジナルのプレゼントをいただきます。応募メー치는、この発表は発送をもってかえさせていただきます。

※個人情報プレゼントをお届けするためだけに利用し、その目的以外の利用はいたしません。

のんびり公式ウェブサイトからのご応募の場合

<http://non-biri.net>

ハガキでご応募の場合

ハガキに

- ①郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、メールアドレス
- ②本誌の入手先 ③今後とりあげてほしい話題
- ④今号で面白かった特集（複数回答可） ⑤ご感想
- ⑥ご希望のプレゼントを明記の上、ご応募ください。

宛先は

〒011-0945 秋田市土崎港西 3-9-15-303  
NPO法人 あきた地域資源ネットワーク内  
あきたびじょん企画室 のんびり編集部行

### プレゼント No.①

#### 池田修三さんの版画 「さくらんぼの実る頃」

特集内で、のんびりチームが  
選び抜いた、  
読者へ贈る1枚です。

W:300mm × H:400 mm  
(額装してお届けいたします)



1  
名様

### プレゼント No.②

#### のんびりブレンドセット

- 秋田市・08COFFEEの「のんびりブレンド珈琲」(100g)
- 秋田市・平沢商店の「のんびりブレンド米」(3合)
- 福田利之「下戸式秋たんぼう」  
「オリジナルステッカー」

これらのオリジナルアイテムを、  
のんびりさんのエコバッグに  
入れて……。



5  
名様



2012.Winter 03  
2012年12月14日発行

#### STAFF

編集長  
藤本智士 (Re:S)

編集  
矢吹史子 (noon design box)  
田宮 慎 (casane tsumugu)  
笹尾千草 (cocolaboratory)  
高木さおり (Re:S)  
山口はるか (Re:S)

アートディレクション & デザイン  
堀口 努 (underson)  
デザイン  
澁谷和之 (澁谷デザイン事務所)

写真  
浅田政志  
広川智基  
鈴木竜典 (R-room)

イラストレーション  
福田利之  
スタタカミツ  
池田聖子  
小笠原未歩

近藤康洋 (mel digital co.,ltd)  
柴 瑠美子

プロデューサー  
鏡 啓記 (NPO法人 あきた地域資源ネットワーク)

発行  
秋田県  
(観光文化スポーツ部観光戦略課イメージアップ推進室  
Tel 018-860-1073)

編集  
あきたびじょん企画室 のんびり編集部  
〒011-0945 秋田市土崎港西 3-9-15-303  
NPO法人 あきた地域資源ネットワーク内  
Phone 018-816-0610  
Facsimile 018-816-0611  
Mail info@non-biri.net

印刷・製本  
秋田活版印刷株式会社

\* 乱丁・落丁誌はお取り替えます。  
\* 本誌内容の無断転記、記載、複写はご遠慮ください。  
\* 本誌データは2012年12月10日現在の情報です。  
あらかじめご了承ください。  
\* 本誌は「あきたびじょん」コミュニケーション媒体企画制作業務  
委託業務で制作いたしました。

© nonbiri all rights reserved.

#### next issue

次号3月発行予定

「のんびり公式ウェブサイト」公開中!

<http://non-biri.net>